宇都宮市埋蔵文化財調査報告　第63集

中島笹塚遺跡
（A区）

平成２０年１月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の東谷・中島地区付近は、小河川低地によって刻まれた低台地が南北に広がっています。ここには東谷古墳群をはじめ、杉村遺跡、権現山遺跡、磯岡北遺跡、立野遺跡などの古代集落や東山道といった貴重な遺跡が複合して遺跡群を形成しております。近年宇都宮環状線や北関東横断道路の開通、そして独立行政法人都市再生機構による土地区画整理事業も進行中です。これらの開発に伴って東谷・中島地区の遺跡群は発掘調査が行われ、古代の人々の営みが大規模に姿を現しつつあります。

今回、報告書刊行の運びとなった中島・笹塚遺跡は、この遺跡群の中の遺跡で、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターの確認調査により古代の集落跡の存在が明らかになっていました。

また、県内最大級の古墳時代の竪穴住居跡の存在が明らかになった立野遺跡の東側に隣接する区域でもあります。その後商業施設建設による影響を受けることになり、関係機関との協議のうえ、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。その結果、古墳時代から奈良時代の竪穴住居跡をはじめとした遺構、遺物が出土しました。これらは当時の集落の様子を知るうえで、非常に貴重な資料を得ることができたものと考えております。

本報告書は、発掘調査で得られた成果をまとめたものであり、多くの方々が多方面におかれまして、広く活用していただけますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成20年1月

宇都宮市教育委員会　教育長　伊　藤　文　雄

例　　言

1．本書は、栃木県宇都宮市東谷町インターパーク５４街区２画地に所在する中島笹塚遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は宇都宮市教育委員会が主体となって行った。現場実務は宇都宮市教育委員会の指導のもと、（有）山武考古学研究所が実施した。

3．調査は、（株）福田屋百貨店、中村土建株式会社が行う施設建設工事に伴い、独立行政法人都市再生機構の発注する東谷・中島地区５４街区２画地埋蔵文化財発掘調査業務委託として実施した。

4．遺跡の面積及び調査期間・調査担当は下記の通りである。

調査面積　1,700㎡

調査期間　平成１９年７月30日～平成１９年９月11日

調査担当　土生　朗治、板垣　宏、大橋　忠昭、越智　徹（山武考古学研究所）

5．本書の執筆はⅠ－１を富川　努（宇都宮市教育委員会）、Ⅰ－２・３を土生、Ⅱ～１～４の遺物関係を越智が、Ⅱ－１～４の遺構原稿及びⅢを土生が担当した。

6．調査期間に於いて、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。

（順不同・敬称略）

田代　隆、後藤　信祐、水野　順敏、（財）とちぎ生涯学習文化財団、宇都宮市シルバー人材センター、カワヒロ産業

凡　　例

1．第１図は国土地理院発行５万分の１『壬生』、第29図は栃木県埋蔵文化財調査報告第274集『東谷・中島地区遺跡群３』の付図１を使用した。

2．本書及び遺物の注記に使用した略号は次の通りである。

中島笹塚遺跡→ＵＴＮＫ-Ａ　住居跡→ＳＩ　土坑→ＳＫ　溝状遺構→ＳＤ

3．遺構実測図中の方位は座標北を示し、土層図・断面図に記した数値は標高を表す。

4．遺構・遺物実測図の縮尺は次の通りである。

遺　構　全体図……1/150　住居跡・土坑……1/60　ピット……1/40　溝跡……1/80

遺　物　土器・石製品……1/３　鉄製品……1/2　玉類……1/1

5．遺物写真図版の縮尺は1/３を基本とし、玉類は原寸、写真図版の土器小片と鉄製品は1/2とした。

6．遺構・遺物実測図中のスクリーントーン等の使用は次の通りである。

（遺構）　（遺物）

粘土　黒色処理　赤彩

● 土器　▲ 石製品　■ 鉄製品

目　　次

序
例言・凡例
Ⅰ．はしがき
1．調査に至る経緯……1
2．遺跡の位置と環境……1
3．調査の方法と経過……3
Ⅱ．遺構と遺物……17
1．竪穴住居跡……17
2．土坑・ピット……31
3．溝……34
4．不明遺構その他……34
5．遺構外遺物……38
Ⅲ．むすび……39

挿図目次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第2図　遺跡の位置図……4
第3図　T3……6
第4図　調査区全体図……7
第5図　1・4区、T6……5
第6図　2・4区、T1・2……11
第7図　3区、T2・4・5・7・10……12
第8図　5区……13
第9図　T2・5・9……14
第10図　T2・8（1）……15
第11図　T2・8（2）……16
第12図　SI01（1）……18
第13図　SI01（2）……19
第14図　SI02……20
第15図　SI03（1）……21
第16図　SI03（2）……22
第17図　SI04……24
第18図　SI05……25
第19図　SI06……26
第20図　SI07……29
第21図　SI08……30
第22図　SK02～05……32
第23図　P01～P17……33
第24図　SD01～04・06・07・SX02……35
第25図　SD05……36
第26図　SX01……37
第27図　調査区内自然流路位置図……38
第28図　遺構外出土遺物……39
第29図　周辺調査区と本調査区の位置関係図……40

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表……３
第２表　試掘トレンチの遺構確認状況……５
第３表　ＳＩ01出土遺物……７
第４表　ＳＩ02出土遺物……９
第５表　ＳＩ03出土遺物……10
第６表　ＳＩ04出土遺物……10
第７表　ＳＩ05出土遺物……10
第８表　ＳＩ06出土遺物……10
第９表　ＳＩ07出土遺物……10
第10表　ＳＩ08出土遺物……10
第11表　土坑一覧表……31
第12表　ピット一覧表……32
第13表　溝一覧表……34
第14表　ＳＤ07出土遺物……34
第15表　ＳＸ01出土遺物……37
第16表　遺構外遺物……39

図版目次

図版１　１区全景、２区全景
図版２　３全景、４区全景
図版３　５区全景、Ｔ１・２遺構確認状況
図版４　Ｔ３・４遺構確認状況
図版５　Ｔ５・６遺構確認状況
図版６　Ｔ７～10遺構確認状況
図版７　１区遺構確認状況、作業風景
図版８　ＳＩ01
図版９　ＳＩ01・02
図版10　ＳＩ03
図版11　ＳＩ03
図版12　ＳＩ03
図版13　ＳＩ04
図版14　ＳＩ04・05
図版15　ＳＩ05・06
図版16　ＳＩ07・08
図版17　ＳＫ02～05、Ｐ02・03
図版18　Ｐ04～07・09・10・12～14・16
図版19　ＳＤ01～06
図版20　ＳＸ01
図版21　出土遺物（１）
図版22　出土遺物（２）
図版23　出土遺物（３）

Ⅰ．はしがき

1．調査に至る経緯

平成19年６月、栃木県宇都宮東谷町のインターパーク宇都宮南54街区において、株式会社福田屋百貨店による（仮称）インターパークビレッジ２の建設が計画された。当該地は、独立行政法人都市再生機構が実施している「宇都宮都市計画事業　東谷・中島土地区画整理事業」地内に所在し、現在、福田屋インターパークビレッジが営業している店舗群の東側にある駐車場が今回の事業予定地である。当地区内には「中島・笹塚遺跡」（県遺跡№4355）が所在しており、平成７～９年度に財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターによって確認調査が実施され、遺構の存在が確認されている地区に該当した。今回の建設予定地の現況は駐車場用地であり、盛土整地による遺跡の現状保存の処置がなされていたため、地下の掘削を伴う開発に際しては遺跡の未調査地区として発掘調査が必要になった。

調査は、事業主である独立行政法人都市再生機構により委託を受けた有限会社山武考古学研究所が、宇都宮市教育委員会の指導のもと実務にあたった。野外調査は平成19年７月30日から開始し、面積1,700㎡の調査を実施することとなった。

2．遺跡の位置と環境

地理的環境

中島笹塚遺跡は、県南東部、宇都宮市と上三川町の市町境にあり、宇都宮市街地からは南南東へ約７km、上三川町の中心地からは北へ約6.5kmに位置する。東へ約4.5kmには鬼怒川が、西へ約１kmには田川があってそれぞれ南流しており、周辺には起伏の少ない田園地帯が広がっている。本遺跡の現況は、以前は水田や畑等の耕作地として利用されていたが、現在は「東谷・中島土地区画整理事業」区域となっており、100haを越える広範囲にわたって先端技術、高度技術産業の研究所や工場や流通業務施設の整備が測られている。また、東側に新４号国道、北側には宇都宮環状線、南側には北関東自動車道が走り、それらと結びついた交通の要衝として発展しつつある。

栃木県の地形は、東部山地、中央部低地、西部山地に分けることができる。東部山地は、八溝、雲子、鶏足などの山塊からなる八溝山地で、西部山地は、那須、高原、日光、足尾などの山塊からなる下野山地と足尾山地である。東西の山地は南北に延なっており、両者に挟まれるように中央部低地が広がる。中央部低地は関東平野の北縁をなし、山地から延びる丘陵、東西に交互に繰り返される台地及び低地・河川からなる。全体的には南に向かって緩やかに傾斜しており、台地を開析する河川はおおむね南流している。これらの台地と低地・河川は、東から、鬼怒川低地（鬼怒川）、岡本・磯岡台地（宝木面・中位）、田原・願成寺台地（田原面・下位）、田川低地（田川）、神主台地（宝積寺面・上位）、宇都宮・祇園原台地（宝木面・中位）と称されている。

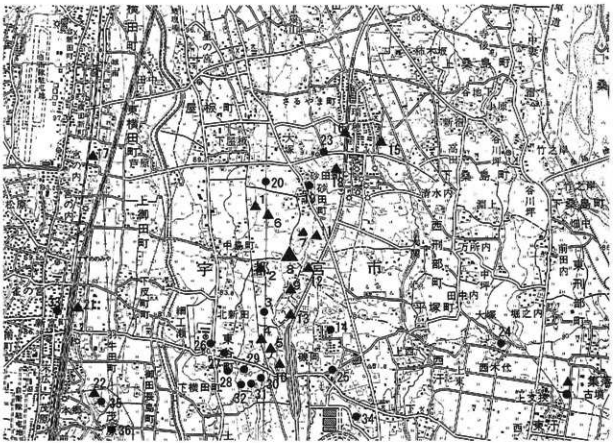
本遺跡は、田原・成願寺台地上にあり、鬼怒川低地（鬼怒川）と田川低地（田川）に挟まれている。両台地内部には、小河川によって形成された細かな開析低地が発達しており、田川低地との比高は８～10mほどである。

本遺跡調査区の標高は約85.7m前後で、調査区の西側に向かってわずかに標高が高くなっている。

歴史的環境

中島笹塚遺跡の周辺には、南北方向に延びる台地に沿って各時代の遺跡が存在する。特に本遺跡で主体となる古墳時代以降の遺跡は数多く、古墳時代～古代にかけての下野国の中心地域のひとつと考えられている。ここでは、旧石器時代から奈良・平安時代にかけての代表的な遺跡について概観してみる。

本遺跡の周辺地域では、旧石器時代の石器や剥片礫群などの出土層位や面的な広がりが把握された資料も増加している。旧石器時代の遺物が出土しているのは、薄市遺跡、西赤堀遺跡、島田遺跡、立野遺跡、杉村遺跡等が挙げられる。



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1：50,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

№.	遺　跡　名	種　別	時期（古墳は墳形他表示）
1	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
2	立野遺跡	集落跡	縄文～中世
3	桜稲荷古墳	古　墳	円墳か。
4	権現山遺跡	集落跡	弥生～奈良時代
5	杉村遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
6	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
7	砂田姥裕遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
8	中島笹塚遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
9	磯岡北遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
10	磯岡遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
11	西刑部西原遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
12	琴平塚古墳	古　墳	帆立貝式古墳（後期）
13	杉村北遺跡	集落跡	縄文～奈良・平安時代
14	西赤堀遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
15	梁瀬野団地遺跡	集落跡	旧石器～奈良・平安時代
16	猿山遺跡	集落跡	奈良・平安時代
17	宮の内遺跡	集落跡	縄文～近世
18	上横田Ａ遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
19	砂田東遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
20	砂田Ａ遺跡	集落跡	古墳～奈良・平安時代
21	牛塚東遺跡	集落跡	縄文～奈良時代
22	権現山北遺跡	集落跡	旧石器～奈良・平安時代
23	下桑島西原古墳群	古　墳	前方後円墳１基，円墳２基
24	高畠神社古墳	古　墳	帆立貝式古墳
25	屋敷東浦愛宕塚古墳	古　墳	前方後円墳（後期）
26	灰子塚古墳	古　墳	前方後円墳
27	笹塚古墳	古　墳	前方後円墳（中期）
28	鶴舞塚古墳	古　墳	円墳（中期）
29	原古墳群	古　墳	円墳８基
30	亟塚古墳群	古　墳	円墳５基
31	権現塚古墳	古　墳	円墳
32	松の塚古墳	古　墳	円墳
33	雀の宮牛塚古墳	古　墳	前方後円墳
34	西赤堀狐塚古墳	古　墳	前方後円墳
35	権現山古墳	古　墳	前方後円墳（前期）
36	大日塚古墳	古　墳	前方後円墳（前期）

縄文時代では、砂田遺跡から縄文時代早期の陥し穴、島田遺跡からは縄文時代中期の竪穴住居跡や袋状土坑が検出されている。薄市遺跡では縄文時代早期の撚糸文土器から前期の黒浜式土器、浮島式土器、晩期の姥山式土器、大洞式土器等が出土している。縄文時代後晩期の遺跡では石川坪遺跡等が挙げられる。

弥生時代では、中期後半以降の遺跡が見られ、杉村遺跡、磯岡遺跡、仏沼遺跡等が挙げられ、後期では二軒屋遺跡を始め、瑞穂野団地内遺跡や権現山北遺跡等から同時期の遺構や遺物が確認されている。

古墳時代中期には、笹塚古墳を中心とする東谷古墳群、砂田遺跡、砂田東遺跡、立野遺跡、杉村遺跡、磯岡遺跡等に見られるような大規模な集落も営まれ、権現山遺跡では豪族居館跡も確認されている。後期になるとさらに集落遺跡の数も増加し、小規模の円墳群が見られるようになる。

奈良時代以降では、本地域は下野国河内郡刑部郷にあたると考えられ、下野の中心地から北北東に延びる東山道が西刑部西原遺跡の南半部の概調査部分で確認されている。周辺には上横田A遺跡、猿山遺跡、砂田遺跡、杉村北遺跡、瑞穂野団地遺跡等の奈良・平安時代の遺跡が見られる。

3．調査の方法と経過

調査の方法

調査は、(株) 福田屋百貨店、中村土建株式会社が行う施設建設工事に伴う、埋蔵文化財記録保存の措置として行われた。施設建設部分の１～３区と埋設管敷設関係の４・５区、その他に側溝・埋設管敷設関係でＴ１～10のトレンチによる遺構確認調査区に分かれる。Ｔ１～10のトレンチ遺構確認区では、工事で埋設管等の掘削深度が遺構残存深度に達する場合に遺構の掘り込み調査を実施し、深度が達しない場合平面記録にとどめた。遺構番号は今回の調査の中で、竪穴住居跡ならばＳ101から順番に通し番号を付することとした。

グリッドの設定は、これまでとちぎ生涯学習文化財団の行っている『東谷・中島地区遺跡群』の発掘調査に従って、国家座標第Ⅸ系Ｘ＝＋52、800m、Ｙ＝＋6、400mを起点とするグリッドを踏襲した。

グリッド杭は20×20mの範囲を単位として、起点から南へ向かって０、１、２、…、東西方向をＹ軸として起点から東へ向かって０、１、２、…と付番されている。

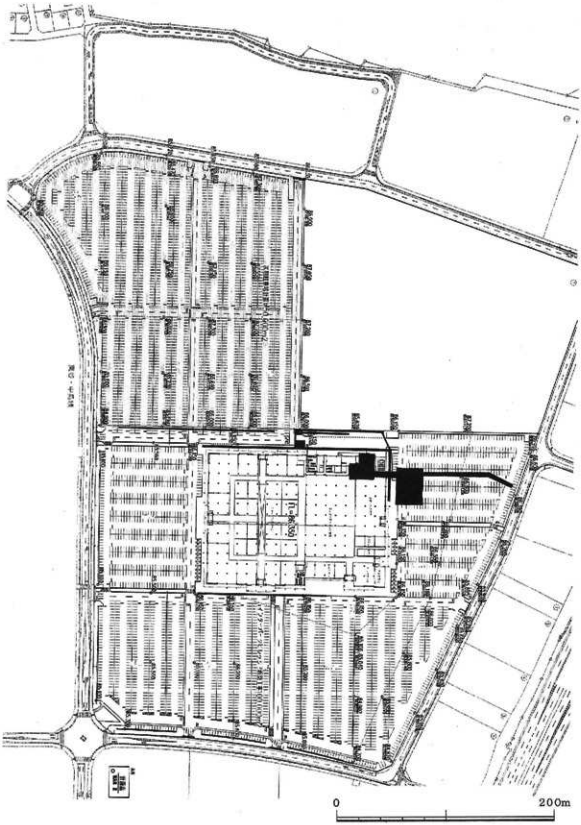
調査は表土掘削、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、写真撮影、測量の手順で行った。

遺構の記録は1/20縮尺を基本として平面・断面図を作成し、遺構・遺物の規模や性格により、1/10、1/40縮尺を使用した。遺跡全測図は完掘個別遺構図をもとに作成した。

写真撮影は調査の各段階に応じて随時行い、白黒35mm判、白黒６×７インチ判、カラーリバーサル35mm判、デジタルカメラを使用した。

調査の経過

調査は平成19年７月30日から平成19年９月11日まで行った。７月30日から１区の重機による表土除去作業を開始した。８月２日から作業員による遺構確認作業を行い、１区からは竪穴住居跡７軒、溝１条、小ピット３基が検出された。２区からは河道と考えられる幅広の落ち込みが確認されたが遺構は検出されなかった。自然河道については、一部機械掘削を行ったが、基本的に河岸部の平面ラインの検出にとどめた。３区からも遺構は確認されなかった。８月６日から１区の土坑、溝の調査に入った。翌７日には１号住居跡の掘り込みを開始し、順次遺構調査を進めた。トレンチ試掘は８月２日にＴ１・Ｔ２、８月22日にＴ３、８月31日にＴ４～６を行った。Ｔ２とＴ５の調査では、２区から延びる自然河道の跡が確認された。Ｔ４では竪穴住居跡が確認され、工事の掘削深度が深いため遺構の掘り込み調査を実施した。Ｔ５は側溝の敷設のための試掘で掘り下げ深度が浅く、遺構確認面まで下げきれず、Ｔ４で確認していた住居跡の調査はできなかった。９月４日にＴ７・８、９月10日にＴ９・10の試掘調査を行い、状況に応じて掘り込み調査を実施した。９月11日にはすべての作業が終了し、現地における調査を完了した。



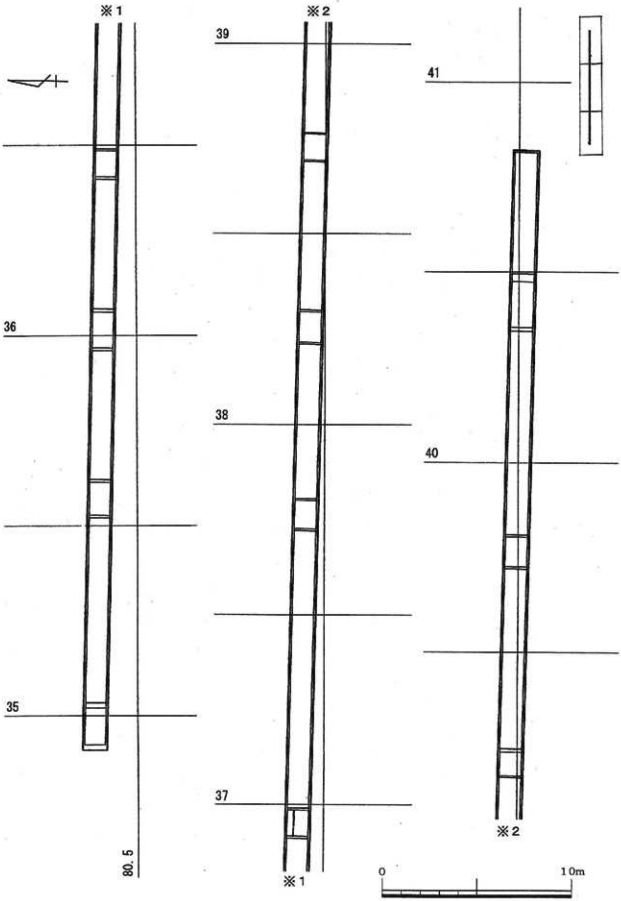
第２図　遺跡の位置図

5．試掘調査の概要

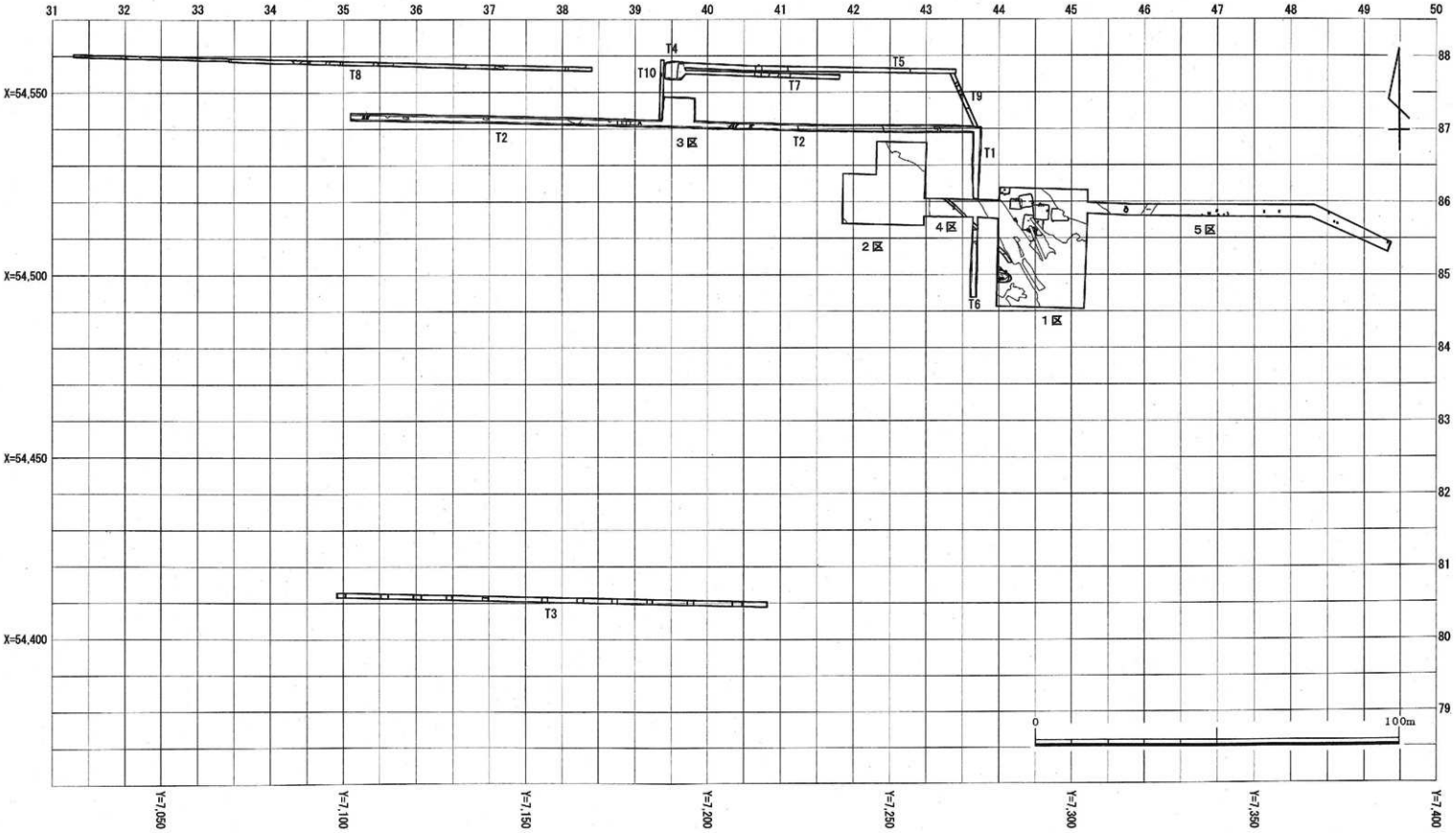
調査の方法で述べたように、本調査を実施する１～５区以外の側溝・埋設管敷設予定箇所については、トレンチ試掘による遺構確認作業を行った。遺構の残存深度と工事掘削深度の関係によっては遺構確認のみで、掘り込み調査を実施していない遺構もある。各トレンチの遺構確認状況については概要を第２表にまとめておく。

第２表　試掘トレンチ遺構確認状況

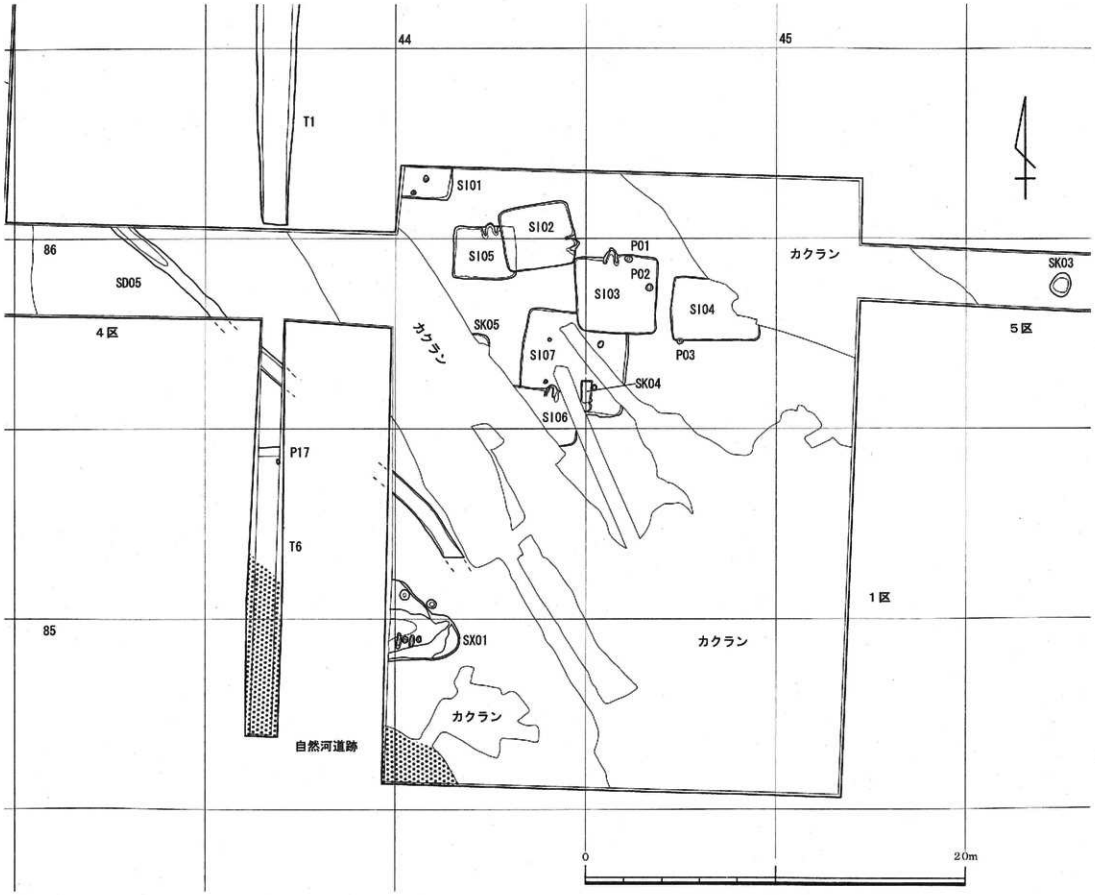
トレンチ名	竪穴住居跡	土坑	溝	不明遺構	撹乱・風倒木痕	自然河道	確認面の深さ(m)
Ｔ１	－	－	－	－	－	－	北:0.91　南:0.99
Ｔ２	－	SK02･06	SD01･02･03･04	SX02	５カ所	○	西:1.20　東:0.63
Ｔ３	－	－	－	－	－	－	西:1.40　東:1.13
Ｔ４	S108	－	－	－	－	－	0.79
Ｔ５	－		SD06	－	－	○	西:0.43　東:0.40
Ｔ６	－	－	－	－	－	－	北:0.60　南:0.95
Ｔ７	S108	－	SD06･07	－	－	○	0.75
Ｔ８	－	SK07	SD08･09･10･11	SX03	２カ所	－	0.79
Ｔ９	－	－	－	－	３カ所	－	北:0.41　南:1.01
Ｔ10	－	SK08	－	－	－	－	0.76



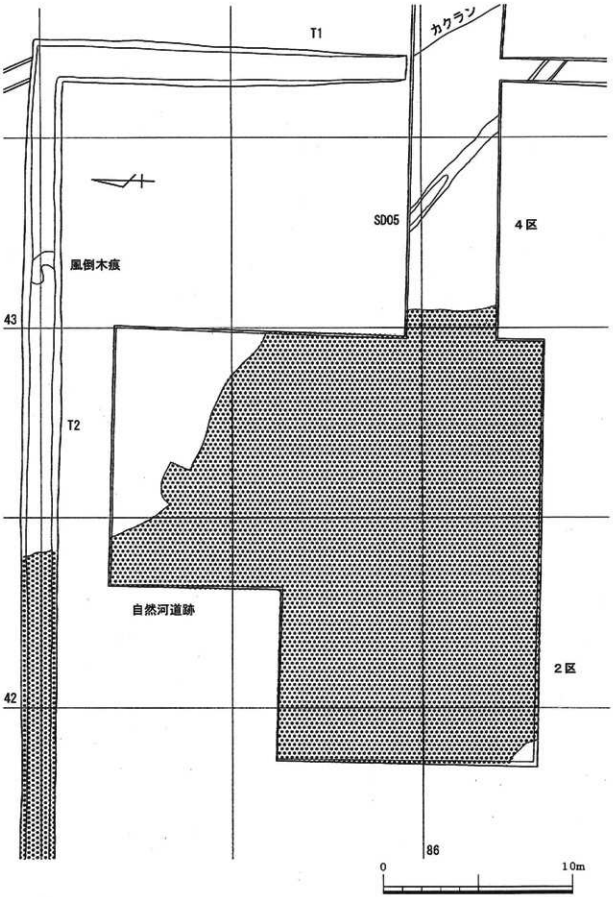
第3図　T3


31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
88
87
86
85
84
83
82
81
80
79
X=54,550
X=54,500
X=54,450
X=54,400
Y=7,050
Y=7,100
Y=7,150
Y=7,200
Y=7,250
Y=7,300
Y=7,350
Y=7,400
T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
1区
2区
3区
4区
5区
0
100m

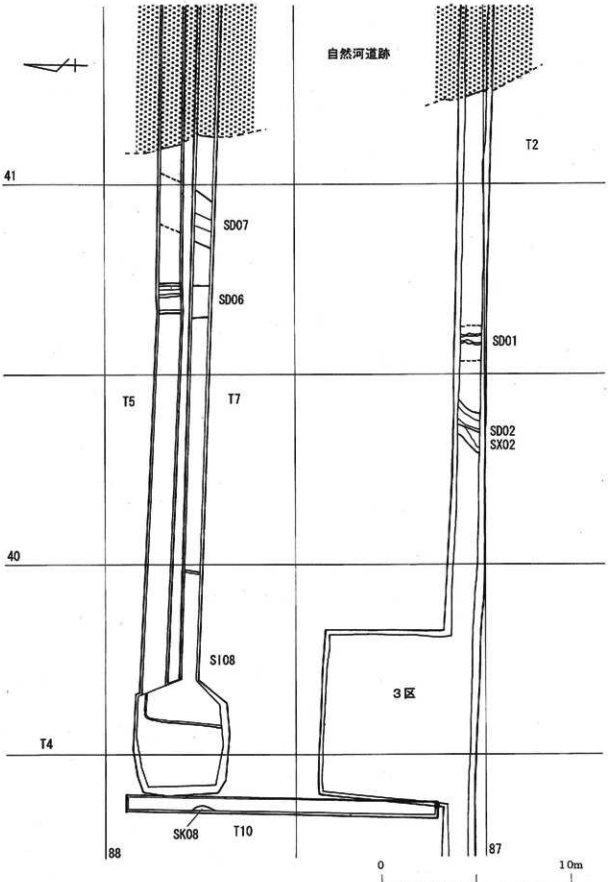
第４図　調査区　全体図


44
45
T1
SI01
SI02
SI05
P01
P02
SI03
SI04
P03
カクラン
SK03
86
SD05
4区
5区
カクラン
SK05
SI07
SK04
SI06
P17
T6
1区
85
SX01
カクラン
カクラン
自然河道跡
0
20m

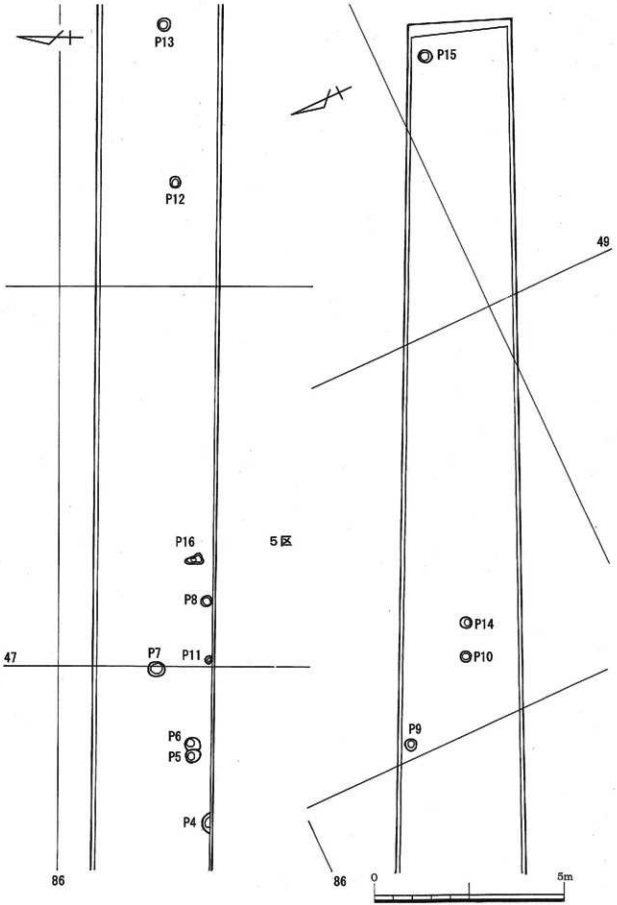
第5図　1・4区　T6



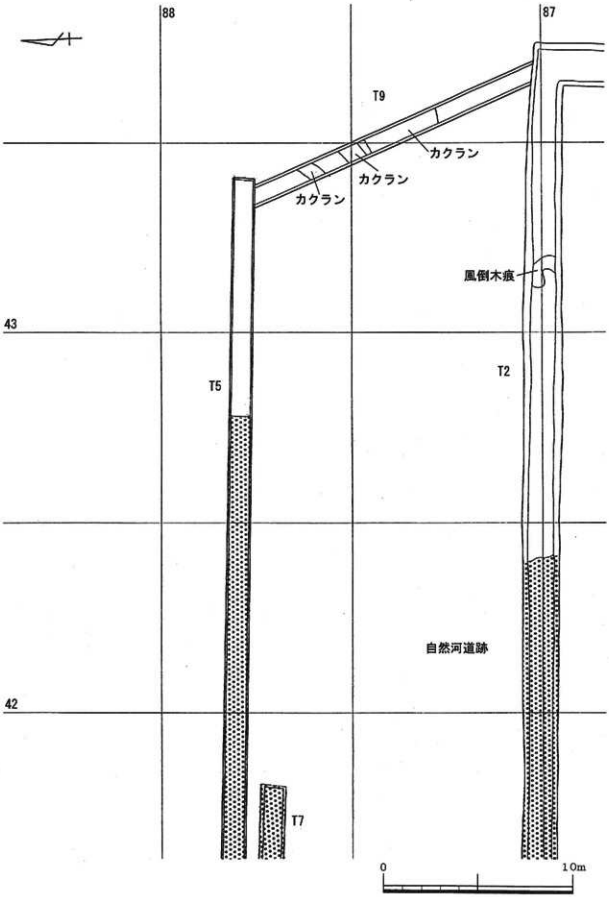
第6図　2・4区　T1・2・6



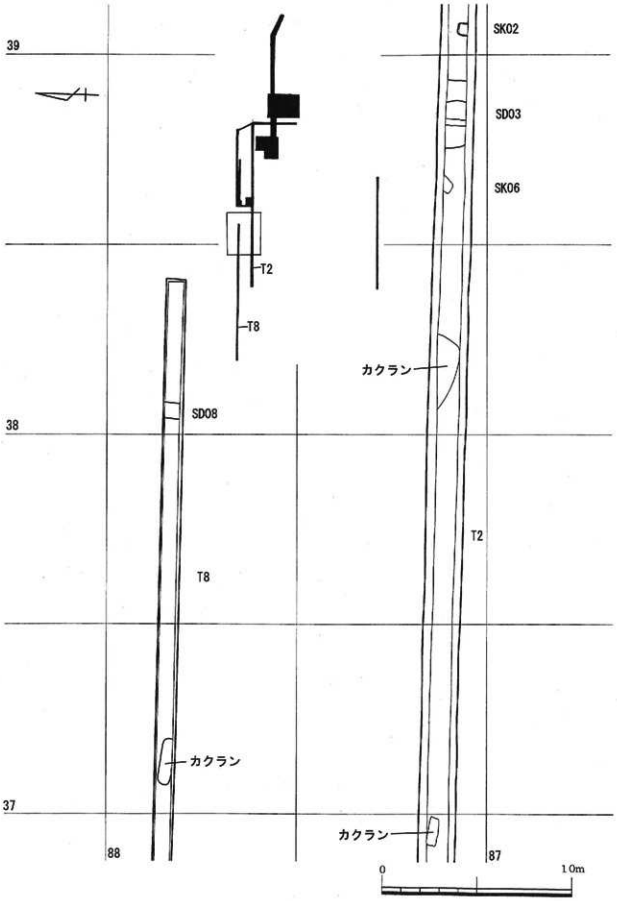
第7図　3区　T2・4・5・7・10



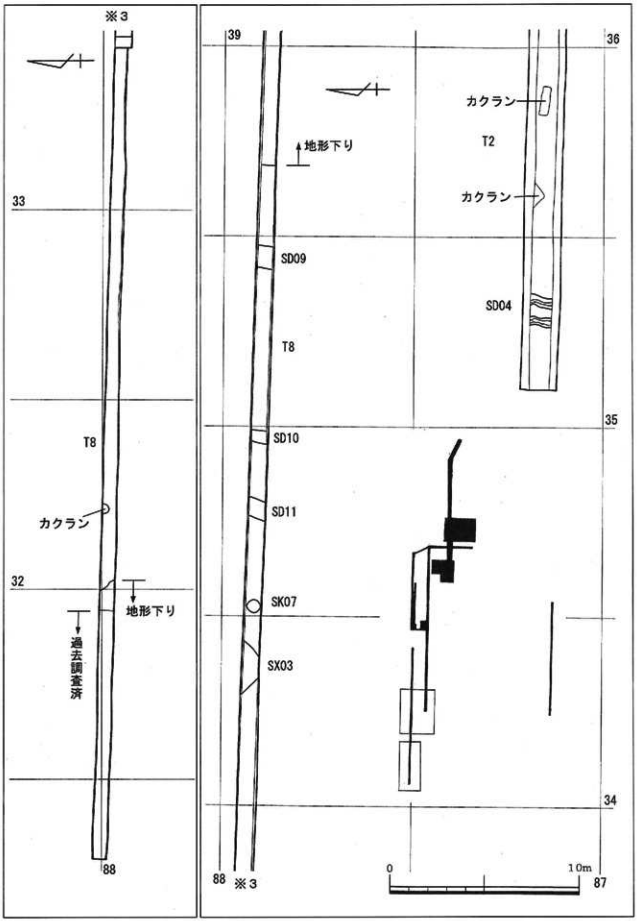
第8図　5区



第９図　T2・5・9


39
38
37
88
87
SK02
SD03
SK06
T2
T8
カクラン
SD08
T8
カクラン
T2
カクラン
0
10m

第10図　T２・８（1）


※3
33
T8
カクラン
32
地形下り
過去調査済
88
39
地形下り
SD09
T8
SD10
SD11
SK07
SX03
88
※3
36
カクラン
T2
カクラン
SD04
35
34
0
10m
87

第11図　T2・8（2）

Ⅱ　遺構と遺物

調査区内からは、竪穴住居跡８軒、土坑８基、小ピット１７基、溝11条、不明遺構３基が確認されている。竪穴住居跡主体の集落遺跡で、古墳時代後期の６世紀後葉から８世紀頃の遺物が出土している。その他の遺構では、５号溝が古墳時代後期の遺物を出土しているが、その他の溝、土坑や小ピットの時期は不明である。

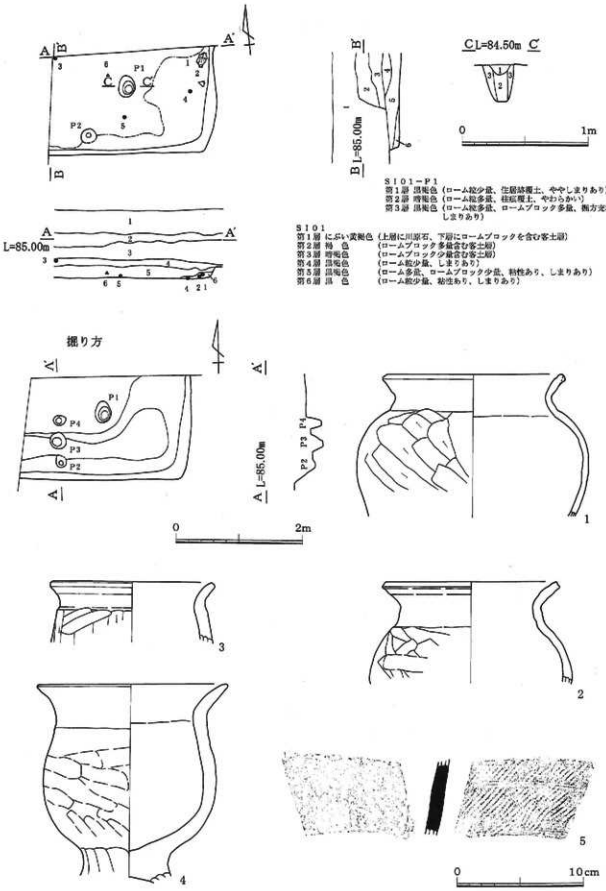
１．竪穴住居跡

ＳＩ０１（第12・13図、図版８・９）

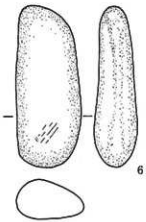
位置　Ｘ＝86、Ｙ＝44　**重複**　なし　**平面形状・規模**　本遺構は１地区の北西角に住居跡の南東コーナー部が確認されているが、調査区外に延びているため全体形状はとらえられない。現況で東西方向2.65ｍ、南北方向1.6ｍである。主軸方向はＮ－７°－Ｅ。　**覆土**　３層の自然堆積。　**壁**　残存高0.18ｍ　**床**　住居跡コーナー部付近を除いて硬化した床面が残存している。　**柱穴**　最終床面で２ヶ所。床下で２ヶ所。Ｐ１は主柱穴で径0.26～0.33ｍ、深さ0.29ｍ。Ｐ２は南壁下端から0.22ｍ離れた位置に中心があり、径0.23ｍ、深さ0.14ｍでほぼ垂直に掘られている。出入り口ピットと考えられる。Ｐ３・４は床下の掘り方調査で確認されたピットで、古い段階のピットと考えられる。おそらく位置関係からＰ２と同じ性格を持ったピットと推測される。　**周溝**　なし。　**出土遺物**　住居跡東壁際の床面から覆土下層にかけて１・２・４の土師器の甕が出土している。４の脚台の付いた土師器甕は、胴部にハケメ痕の残るヘラナデ調整が施されている。　**所見**　主柱穴を持った竪穴住居跡で、出土している遺物は６世紀後葉から７世紀前葉頃のものかと思われる。

第３表　ＳＩ０１号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 甕	口径(13.6) 底径 器高[11.1]	胴部外面ヘラケズリ。内面丁寧なナデ。	外:淡橙褐色 内:淡橙褐色	石英粒、長石粒 普通	覆土 口縁～胴部1/3	S101No.1
2	土師器 甕	口径(13.4) 底径 器高[7.9]	胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	外:暗褐色 内:淡灰褐色	石英・金雲母粒、 チャート微 普通	覆土 口縁部の1/4	S101No.2
3	土師器 甕	口径(12.4) 底径 器高[4.7]	胴部外面縦位ヘラケズリ。内面ナデ。	外:淡褐色 内:淡褐色	微砂粒、スコリア粒 普通	覆土 口縁部片	S101No.6
4	土師器 台付甕	口径(15.6) 底径 器高[15.1]	胴部外面ハケ痕の残るヘラナデ、脚部ヘラケズリ。内面ナデ。	外:暗褐色 内:暗褐色	砂粒 普通	床面 口縁部2/3・脚部欠損	S101No.3
5	須恵器 甕	口径- 底径- 器高-	外面平行叩き。	外:灰色 内:灰色	長石 普通	床面 胴部片	S101No.7
6	石製品 編物石	全長12.7 幅　5.2 厚み3.0 重量335.9	不整長方形の自然石。細粒安山岩。			覆土	S101No.10


A
B
A'
B'
P1
P2
C
C'
C1=84.50m
B1=85.00m
0
1m
L=85.00m
S101→P1
第1層 淡褐色（ローム粒少量、住居跡覆土、ややしまりあり）
第2層 暗褐色（ローム粒多量、徒拡覆土、やわらかい）
第3層 淡褐色（ローム粒多量、ロームブロック多量、掘方埋土、しまりあり）
S101
第1層 にぶい黄褐色（上層に川原石、下層にロームブロックを含む客土層）
第2層 褐 色（ロームブロック多量含む客土層）
第3層 暗褐色（ロームブロック少量含む客土層）
第4層 淡褐色（ローム粒少量、しまりあり）
第5層 淡褐色（ローム多量、ロームブロック少量、粘性あり、しまりあり）
第6層 淡 色（ローム粒少量、粘性あり、しまりあり）
掘り方
P4
P3
P2
A1=85.00m
0
2m
1
2
3
4
5
0
10cm

第12図　S101（1）



第13図　ＳＩ０１（２）

ＳＩ０２（第14図、図版９）

位置　Ｘ＝85・86、Ｙ＝44　**重複**　ＳＩ０５の東壁を切り込んでおり、本遺構が新しい。　**平面形状・規模**　3.70×3.80mの方形で、主軸Ｎ－81°－Ｅ。　**覆土**　３層の自然堆積。　**壁**　残存高0.13m　**床**　中央部から東側が特に硬化している。　**柱穴**　主柱穴はなし。ピットは２ヶ所。Ｐ１は径0.23～0.28m、深さ0.09mで出入り口ピットと考えられる。Ｐ２は径0.22～0.25m、深さ0.02m、カマド右袖脇にあいた非常に浅いくぼみ穴で、周囲に床面の踏みしめが見られない点やカマドとの位置関係から見て、水甕等のカマド関連具の設置跡の可能性が考えられる。

周溝　なし　**カマド**　東壁中央から南寄りの位置にあり、最大幅1.02m、袖部奥行き0.56m、燃焼室幅0.40m、燃焼室奥行き0.75mを測る。袖部は灰色粘土を主体として構築している。右袖外面にはにぶい褐色粘土を貼り付けている。　**出土遺物**　１の土師器甕はＰ１付近の覆土から小片で出土している。

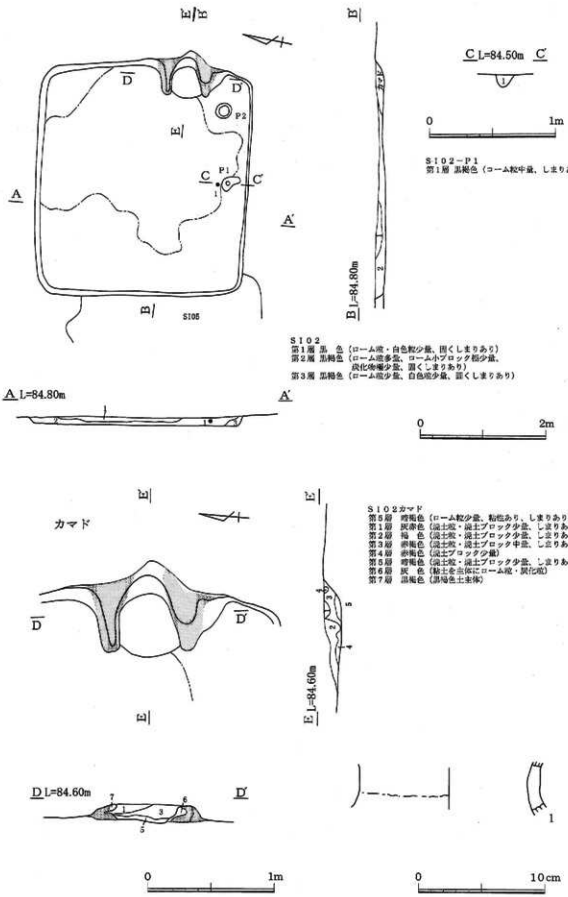
第４表　ＳＩ０２号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

№1	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 甕	口径 底径 器高[3.2]	頸部内外面ヨコナデ。	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色	砂粒、スコリア微 普通	覆土（２層） 頸部破片	S102№1

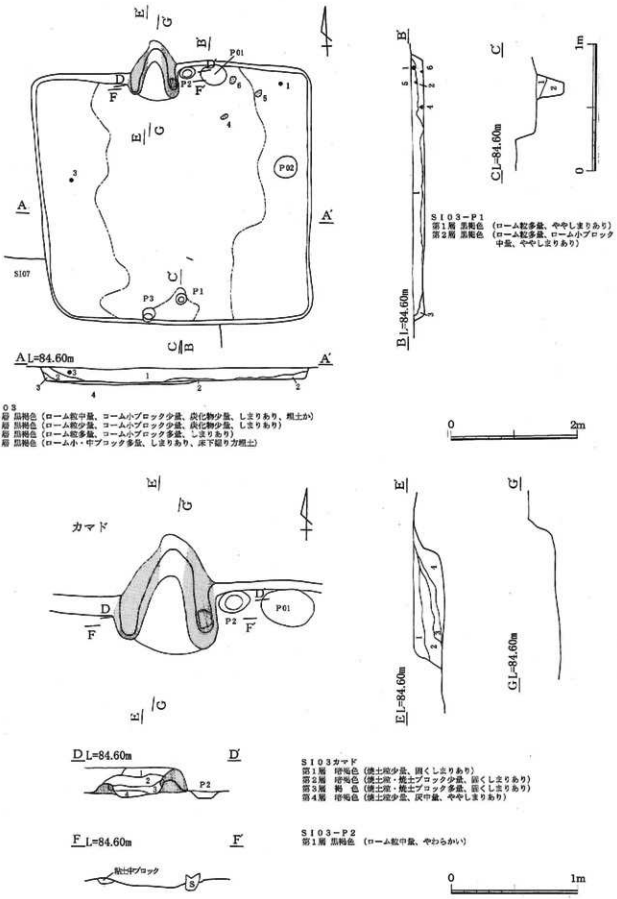
ＳＩ０３（第15・16図、図版10～12）

位置　Ｘ＝85、Ｙ＝44　**重複**　ＳＩ０７の北壁を切り込んでおり、本遺構が新しい。Ｐ０１・Ｐ０２は本遺構の床面を掘り込んでいる。　**平面形状・規模**　4.42×4.16mの方形で、主軸はＮ－３°－Ｗ。　**覆土**　３層の自然堆積。

壁　残存高0.25m。　**床**　東西の壁際沿いを除いた住居中央部分が硬化している。床下掘り方の掘り込みは住居跡西側寄りに浅く見られる。　**柱穴**　主柱穴はなし。ピットは３ヶ所。Ｐ１は径0.16～0.17m、深さ0.22mで出入り口


E
E'
D
D'
P2
P1
C
C'
A
A'
B
B'
S105
B L=84.80m
C L=84.50m
0
1m
S102－P1
第1層 黒褐色（コーム粒中量、しまりあり）
S102
第1層 黒 色（ローム粒・白色粒少量、固くしまりあり）
第2層 黒褐色（ローム粒多量、ローム小ブロック粒少量、
炭化物極少量、固くしまりあり）
第3層 黒褐色（ローム粒少量、白色粒少量、固くしまりあり）
A L=84.80m
0
2m
カマド
S102カマド
第5層 暗褐色（ローム粒少量、粘性あり、しまりあり）
第1層 灰赤色（焼土粒・焼土ブロック少量、しまりあり）
第2層 褐 色（焼土粒・焼土ブロック少量、しまりあり）
第3層 赤褐色（焼土粒・焼土ブロック中量、しまりあり）
第4層 赤褐色（焼土ブロック少量）
第5層 暗褐色（焼土粒・焼土ブロック少量、しまりあり）
第6層 炭 色（粘土全体にローム粒・炭化粒）
第7層 黒褐色（黒褐色土主体）
E L=84.60m
D L=84.60m
0
1m
0
10cm

第14図 S102



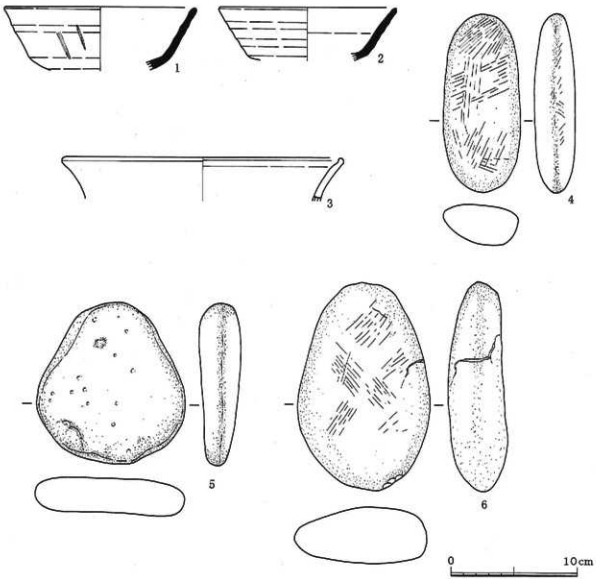
SI03
第1層 黒褐色（ローム粒中量、コーム小ブロック少量、炭化物少量、しまりあり、粗土か）
第2層 黒褐色（ローム粒少量、コーム小ブロック少量、炭化物少量、しまりあり）
第3層 黒褐色（ローム粒多量、コーム小ブロック多量、しまりあり）
第4層 黒褐色（ローム小・ザブロック多量、しまりあり、床下貼り方粗土）

SI03-P1
第1層 黒褐色（ローム粒多量、ややしまりあり）
第2層 黒褐色（ローム粒多量、ローム小ブロック中量、ややしまりあり）

SI03カマド
第1層 暗褐色（焼土粒少量、固くしまりあり）
第2層 暗褐色（焼土粒・焼土ブロック少量、固くしまりあり）
第3層 褐 色（焼土粒・焼土ブロック多量、固くしまりあり）
第4層 暗褐色（焼土粒少量、炭中量、ややしまりあり）

SI03-P2
第1層 黒褐色（ローム粒中量、やわらかい）

第15図 SI03（1）



第16図　ＳＩ０３（２）

ピットと考えられる。Ｐ２は径0.17～0.24m、深さ0.07mでカマド右袖脇にあいている。Ｐ３は径0.16～0.21m、深さ0.52mでＰ１に近い住居南壁直下にあいている。　**周溝**　なし　**カマド**　北壁中央やや西寄りの位置にあり、最大幅0.75m、袖部奥行き0.55m、燃焼室幅0.32m、燃焼室奥行き0.95mを測る。右袖部には袖先端から奥に向かって0.25mの位置に角礫柱状の石材を立て、それを芯材として左袖部では焼土混じりのにぶい褐色粘土、右袖では灰色粘土を主体にし、両袖の内側にはにぶい褐色粘土のブロックが見られる。袖部から奥壁に至る部分の貼り付け粘土は３～４cm大の小礫以外比較的混じりのない粘土が使用されている。　**出土遺物**　覆土中から１・２の須恵器の坏、３の土師器の甕が破片で出土している。石製品では、４の織物石、５・６の台石状の自然石が覆土から出土している。　**所見**　出土遺物から８世紀代の住居跡と考えられる。

第5表　ＳＩ０３号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

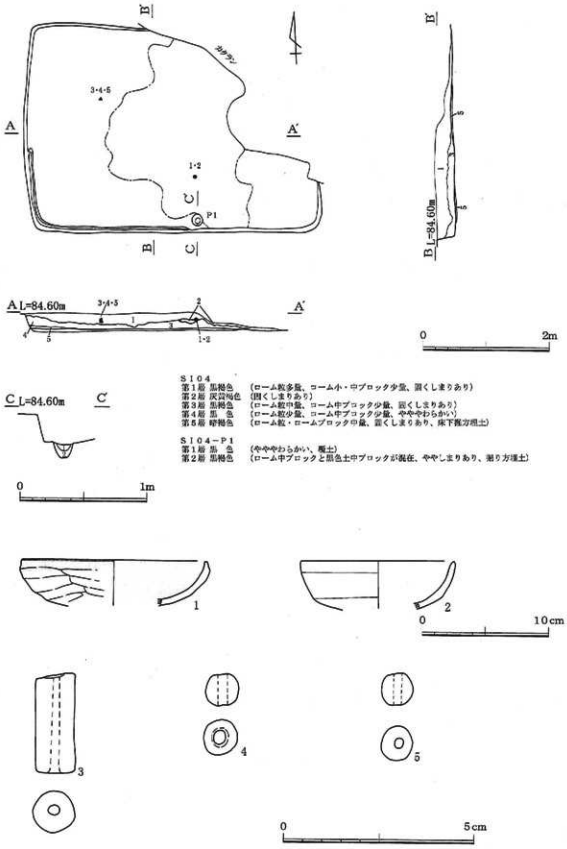
No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
2	須恵器 坏	口径(15.0) 底径 器高[4.9]	底部外面回転ヘラケズり。	外:淡灰褐色 内:灰色	石英粒、白色礫、ス 普通ア 普通	Ｐ１覆土 15%	SI03No.3
2	須恵器 坏	口径(13.2) 底径 器高	底部外面回転ヘラケズり。	外:灰色 内:灰色	半透明粒 普通	覆土 15%	SI03フク土
1	土師器 坏	口径(21.8) 底径 器高	口縁部内外面ヨコナデ。	外:淡橙褐色 内:淡灰褐色	細砂粒	覆土 口縁部破片	SI03フク土
4	石製品 台石	全長13.9 幅　6.0 厚み3.2 重量434.3	扁平で長楕円形の自然石。片面に擦痕あり。細粒安山岩。			覆土	SI03No.12
5	石製品 台石	全長12.8 幅　11.7 厚み2.8 重量612.6	扁平で楕円形の自然石。安山岩。片面に敲打痕あり。			覆土	SI03No.9
6	石製品 編物石	全長16.3 幅　10.3 厚み4.3 重量1142	扁平で楕円形の自然石。細粒安山岩。片面に敲打痕あり。			覆土	SI03No.10

ＳＩ０４（第17図、図版13・14）

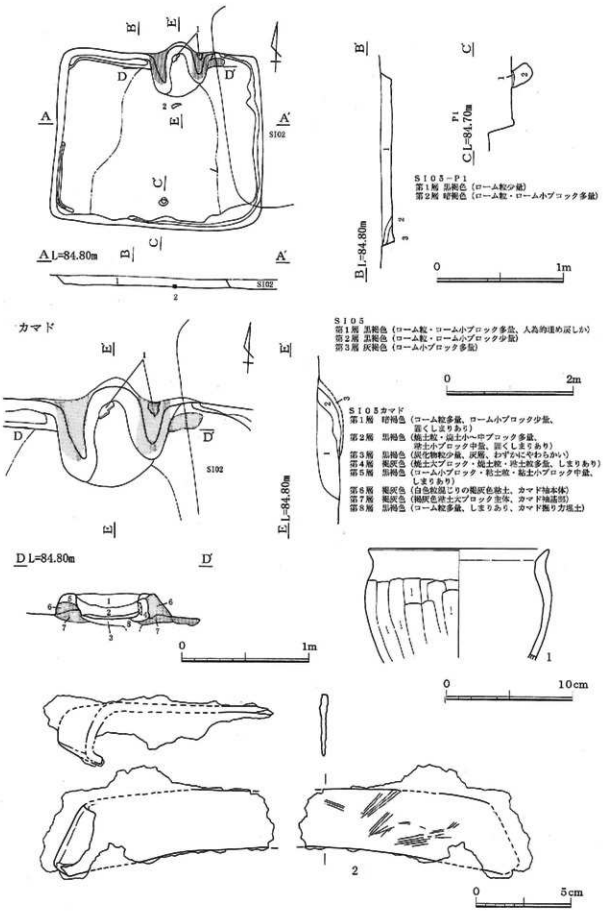
位置　Ｘ＝85、Ｙ＝44　**重複**　なし。　**平面形状・規模**　4.63×3.32mの方形で、主軸はＮ－１°－Ｅ。　**覆土**　５層の自然堆積。　**壁**　残存高0.3m。　**床**　Ｐ１の前面から住居跡中央部がやや硬化している。床下の掘り方の深さは住居跡中心部で厚さ２～３cmと薄く、北西と南西コーナー部で５～６cm程度であった。　**柱穴**　１ヶ所。Ｐ１は径0.16～0.17m、深さ0.12mで出入りピットと考えられる。　**周溝**　南壁の西側半分と東壁の南側にかけて、壁沿いに幅約３～４cm、深さ１～５cmの規模で確認されている。　**カマド**　確認されていない。北東部が攪乱によって壊されており、壊された範囲にあったものと考えられる。　**出土遺物**　１・２の土師器の坏と玉類が覆土から出土している。玉類３点はまとまって出土している。　**所見**　出土遺物から７世紀前葉頃の住居跡と考えられる。

第6表　ＳＩ０４号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

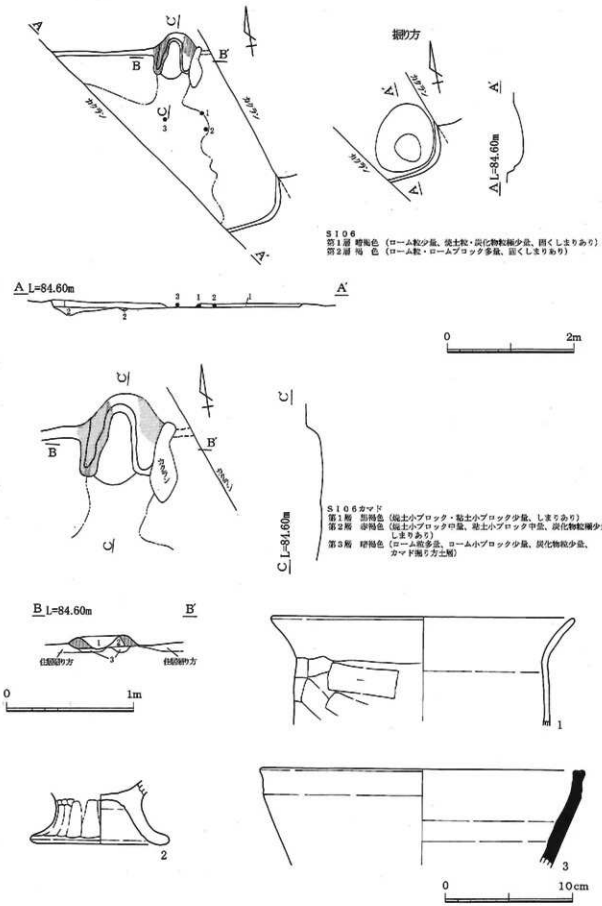
No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 坏	口径(14.4) 底径 器高(3.3)	体部～底部外面ヘラケズり。内面ヨコナデ、黒色処理。	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	石英粒、黒色光沢粒 普通	Ｐ１覆土 口縁部破片	SI04No.10
2	土師器 坏	口径(12.0) 底径 器高(4.2)	体部外面ナデ。底部外面ヘラケズり。	外:淡橙褐色 内:淡橙褐色	スコリア 普通	覆土 15%	SI04No.10
3	石製品 管玉	全長2.7 口径1.0 孔径0.2～0.15 重量5.95	濃緑色。碧玉製。			覆土	SI04No.1
4	石製品 小玉	口径0.9 厚み0.9 孔径0.3 重量1.35	蛇紋岩製。			覆土	SI04No.2
5	石製品 小玉	口径0.9 厚み0.8 孔径0.2 重量1.05	蛇紋岩製。			覆土	SI04No.3


B
B'
A
A'
3・4・5
1・2
P1
C
C'
A L=84.60m
B L=84.60m
C L=84.60m
0
2m
1m
10cm
5cm
S I 0 4
第1層 黒褐色 (ローム粒多量、コーム小・中ブロック少量、固くしまりあり)
第2層 灰褐色 (固くしまりあり)
第3層 黒褐色 (ローム粒中量、コーム中ブロック少量、固くしまりあり)
第4層 黒 色 (ローム粒少量、コーム中ブロック少量、やややわらかい)
第5層 暗褐色 (ローム粒・ロームブロック中量、固くしまりあり、床下掘方埋土)
S I 0 4－P 1
第1層 黒 色 (やややわらかい、粗土)
第2層 黒褐色 (ローム中ブロックと黒色土中ブロックが混在、ややしまりあり、掘り方埋土)

第17図 S I 0 4


A L=84.80m
B L=84.80m
C L=84.70m
S102
カマド
D L=84.80m
E L=84.80m
S105－P1
第1層 黒褐色（ローム粒少量）
第2層 暗褐色（ローム粒・ローム小ブロック多量）
S105
第1層 黒褐色（ローム粒・ローム小ブロック多量、人為的埋め戻しか）
第2層 黒褐色（ローム粒・ローム小ブロック少量）
第3層 灰褐色（ローム小ブロック多量）
S105カマド
第1層 暗褐色（ローム粒多量、ローム小ブロック少量、
焼くし焼りあり）
第2層 黒褐色（焼土粒・焼土小ヘモブロック多量、
焼土小ブロック少量、焼くしまりあり）
第3層 黒褐色（炭化物粒少量、灰層、わずかにやわらかい）
第4層 褐灰色（焼土大ブロック・焼土粒・焼土粒多量、しまりあり）
第5層 黒褐色（ローム小ブロック・粒土粒・粘土小ブロック中量、
しまりあり）
第6層 褐灰色（白色粒混じりの褐灰色粒土、カマド袖本体）
第7層 褐灰色（褐灰色焼土大ブロック主体、カマド袖基部）
第8層 黒褐色（ローム粒多量、しまりあり、カマド掘り方埋土）
0 1m
0 2m
0 10cm
0 5cm

第18図 S105


A
C
B
B'
カクラン
C'
3
2
A'
C'
振り方
A'
A
A L=84.60m
S106
第1層 暗褐色 (ローム粒少量、焼土粒・炭化物粒極少量、固くしまりあり)
第2層 褐 色 (ローム粒・ロームブロック多量、固くしまりあり)
A L=84.60m
A'
1
2
3
0
2m
C
B
B'
カクラン
C'
C
C L=84.60m
S106カマド
第1層 黒褐色 (焼土小ブロック・粘土小ブロック少量、しまりあり)
第2層 赤褐色 (焼土小ブロック中量、粘土小ブロック中量、炭化物粒極少量、しまりあり)
第3層 暗褐色 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量、炭化物粒少量、カマド掘り方土層)
B L=84.60m
B'
1
2
3
住居掘り方
住居掘り方
0
1m
1
2
3
0
10cm

第19図 S106

ＳＩ０５（第18図、図版14・15）

位置　Ｘ＝85・86、Ｙ＝44　**重複**　ＳＩ２によって北東コーナー部と東壁を壊されている。　**平面形状・規模**　3.32×2.76mの長方形で、主軸はＮ－２°－Ｗ。　**覆土**　１層の自然堆積。　**壁**　残存高0.16m　**床**　住居跡東壁と西壁寄りを除いて住居跡中央部は硬化している。　**柱穴**　１ヶ所。Ｐ１は径0.14～0.15、深さ0.17mで約64°の角度で南に傾いている。　**周溝**　北壁のカマドの西側から西壁・南壁にかけて、壁沿いに深さ３～９cm、幅約12cm前後の規模で確認されている。　**カマド**　最大幅1.00m、袖部奥行き0.68m、燃焼室幅0.30m、燃焼室奥行き0.86mである。袖部は基部に褐灰色粘土を、芯には白色粒混じりの褐灰色粘土を使用して構築している。　**出土遺物**　１の土師器甕がカマド袖内や掘り方から、２の鉄鎌はカマド前面の床上から出土している。　**所見**　出土遺物から６世紀後葉～７世紀前葉頃の住居跡と考えられる。

第７表　ＳＩ０５号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 小型甕	口径(14.2) 底径 器高[8.6]	胴部外面縦位ヘラケズリ。内面ナデ。	外:暗褐色 内:黒褐色	小礫、砂粒 やや不良	カマド袖部 25%	SI05No.10、12、カマド袖
2	鉄製品 鎌	全長[11.6] 幅　3.6 厚　0.5 重量69.48	左手鎌。刃部先端欠損。裏面に木質付着。折り返し近くで折り曲げられている。			床面	SI05No.5

ＳＩ０６（第19図、図版15）

位置　Ｘ＝85、Ｙ＝44　**重複**　ＳＩ０７の南部を壊している。　**平面形状・規模**　東西方向3.40m以上、南北方向2.95mの長方形と見られる。主軸方向はＮ－８°－Ｅ。　**覆土**　１層。　**壁**　残存高0.08m。　**床**　カマド前面から住居跡中央部にかけて硬化している。床下の掘り方は住居南東コーナー部がやや深く掘り下げられている。　**柱穴**　なし。　**周溝**　なし。　**カマド**　最大幅0.69m以上、袖部奥行き0.40m、燃焼室幅0.34m、燃焼室奥行き0.73m

出土遺物　土器は床面付近の覆土中から１の土師器の甕、２の脚台部、３の須恵器の鉢の口縁部がいずれも破片で出土している。３の須恵器は甑かもしれない。２の土師器の脚台部は７世紀代の混入遺物か。　**所見**　出土遺物から８世紀後半の住居跡と考えられる。

第８表　ＳＩ０６号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 甕	口径（21.6） 底径 器高[8.0]	胴部外面ヘラケズリ。	外:明橙色 内:明橙色	石英微粒 良好	覆土 口縁の25%	SI06No.7
2	土師器 台付甕	口径 底径(10.9) 器高[3.9]	脚部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	外:暗褐色 内:橙色	砂粒、角閃石 普通	覆土 脚部片	SI06No.6
3	須恵器 鉢	口径(25.4) 底径 器高[7.6]	体部内外面ロクロナデ。	外:灰色 内:灰色	石英 普通	覆土 口縁部片	SI06No.13

ＳＩ０７（第20図、図版16）

位置　Ｘ＝85、Ｙ＝44　**重複**　ＳＩ03・06、ＳＫ04と重複している。いずれの遺構よりも古い遺構である。　**平面形状・規模**　5.60×5.30mの方形で、北東部と南西部が遺構重複により壊されている。主軸方向はＮ－５°－Ｅ。

覆土　１層。床下覆土は全体に厚さ約３～５cm。　**壁**　残存高0.14m　**床**　４本主柱穴の内側全体とカマドの位置が推測されるＰ１北側付近が硬化している。　**柱穴**　４ヶ所。Ｐ１は径0.28×0.37m、深さ0.32m。Ｐ２は径0.28×0.29m、深さ0.43m。Ｐ３は径0.16×0.21m、深さ0.38m。Ｐ４は径0.16×0.17m、深さ0.34m。Ｐ１・２は床面精査で検出されず、床面を断ち割って確認されたピットで、Ｐ３・４は床面精査で確認されたピットである。

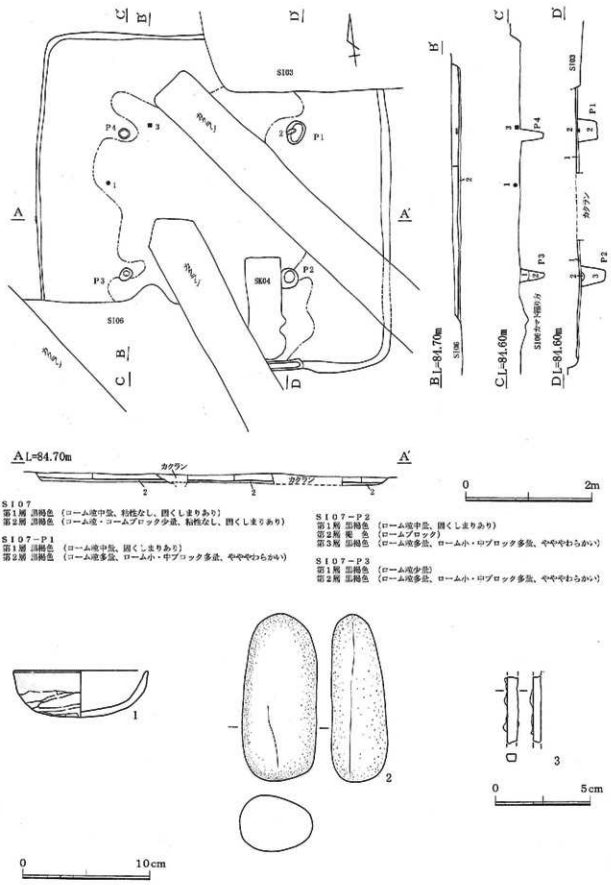
周溝　南壁の一部に幅13cm、長さ55cmで残存している。周溝の残存している部分は住居の床面が壁側に向かって緩やかに傾斜して高くなっている。このことから、周溝は本来全周していたものが、一般的に壁際の床面は軟質なため、調査で削平されてしまっている可能性が考えられる。残存しているのはたまたま壁際まで床面が硬化していたため残存しているのかもしれない。　**カマド**　調査区内では確認されていない。　**出土遺物**　１の土師器の坏、３の不明鉄製品が覆土から、２の編み物石がＰ１覆土から出土している。　**所見**　出土遺物から７世紀後葉～８世紀前葉頃の住居と考えられる。

第９表　ＳＩ０７号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

№1	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 坏	口径(10.6) 底径 器高(3.6)	口縁部内外面ヨコナデ、黒色処理。体～底部ヘラケズリ。丸底。	外:明橙色 内:明橙色	微砂粒、スコリア やや良好	覆土 25%	S107№2
2	石製品 編物石	全長13.2 幅　5.7 厚み4.3 重量515.9	棒状の自然石。安山岩。			Ｐ１覆土上層	S107№16
3	鉄製品	全長(3.5) 幅　0.5 厚　0.4 重量2.50	断面四角形の不明鉄製品。両端部欠損。			覆土	S107№3

ＳＩ０８（第21図、図版16）

位置　Ｘ＝87、Ｙ＝39　**重複**　なし　**平面形状・規模**　南北方向4.25m以上、東西方向8.02mで、主軸方向はＮ－６°－Ｅ。Ｔ４とＴ８にかかった部分の調査のため全体形状は不明であるが、方形になるものと思われる。　**覆土**　４層の自然堆積。最下層に崩壊したカマドに由来すると思われる砂質粘土と焼土が多量に堆積している。　**壁**　残存高0.20m　**床**　壁際を除いて硬化している。　**柱穴**　調査範囲内では確認されていない。　**周溝**　西壁から北西コーナー部にかけて深さ幅約６cm、深さ３～４cmの規模で見られる。　**カマド**　確認されていない。　**出土遺物**　７の須恵器甕口縁部と９の鉄鎌は床面から、他の土師器坏・甕は覆土下層から出土している。　**所見**　出土遺物のうち覆土出土の１～４の土師器坏類や６の土師器甕は７世紀中頃の遺物か。



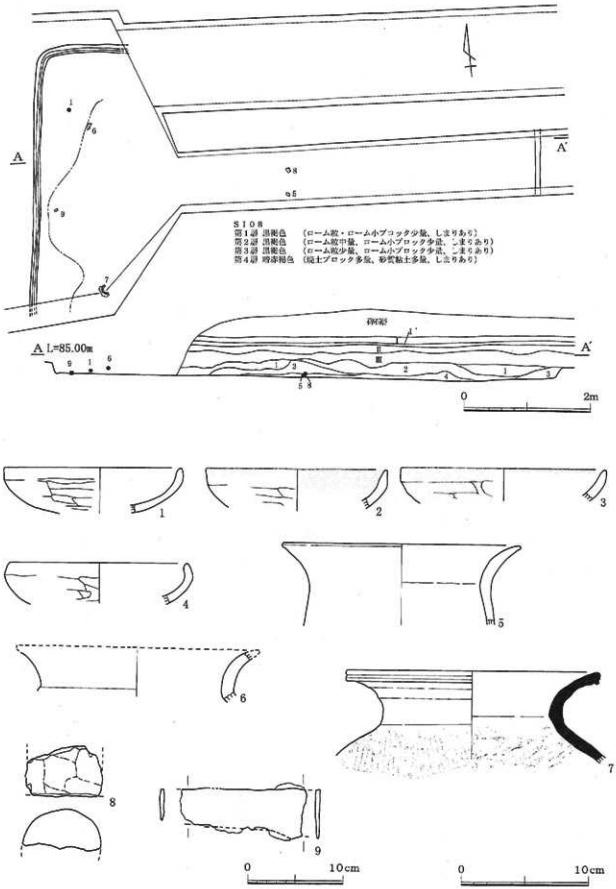
S I 0 7
第1層 淡褐色 （ローム攪中量、粘性なし、固くしまりあり）
第2層 淡褐色 （ローム攪・コームブロック少量、粘性なし、固くしまりあり）

S I 0 7 − P 1
第1層 淡褐色 （ローム攪中量、固くしまりあり）
第2層 淡褐色 （ローム攪多量、ローム小・中ブロック多量、やややわらかい）

S I 0 7 − P 2
第1層 黒褐色 （ローム攪中量、固くしまりあり）
第2層 褐 色 （ロームブロック）
第3層 黒褐色 （ローム攪多量、ローム小・中ブロック多量、やややわらかい）

S I 0 7 − P 3
第1層 黒褐色 （ローム攪少量）
第2層 黒褐色 （ローム攪多量、ローム小・中ブロック多量、やややわらかい）

第20図 S I 0 7


A
A'
SI08
第1層 黒褐色 (ローム粒・ローム小ブロック少量、しまりあり)
第2層 黒褐色 (ローム粒中量、ローム小ブロック少量、しまりあり)
第3層 黒褐色 (ローム粒少量、ローム小ブロック少量、しまりあり)
第4層 暗赤褐色 (焼土ブロック多量、彩度黒土多量、しまりあり)
A L=85.00m
0
2m
0
10cm
0
10cm

第21図 SI08

第10表　ＳＩＯ８号住居跡出土遺物　　[ ] 残存値、( ) 推定値

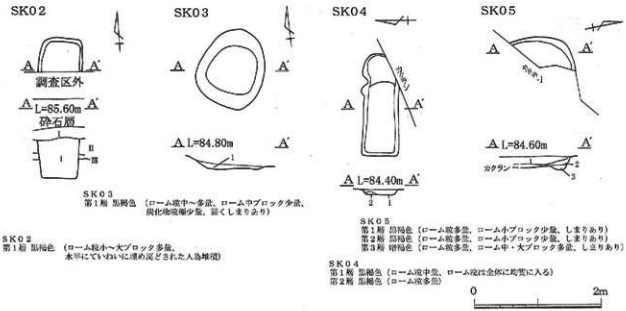
No.	器種	法量 (cm・g)	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 坏	口径(13.8) 底径 器高	体～底部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	スコリア以外夾雑物含まない。 普通	覆土 口縁部片	SI08№11
2	土師器 坏	口径(14.1) 底径 器高	体～底部外面ヘラケズリ。内面ナデ、黒色処理。	外:淡黄褐色 内:灰褐色	雲母粒、スコリア 普通	覆土 口縁部片	SI08
3	土師器 坏	口径(16.0) 底径 器高	体部外面ヘラケズリ、黒色処理。内面ナデ。	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	スコリア以外夾雑物含まない。 普通	覆土 口縁部片	SI08
4	土師器 坏	口径(13.8) 底径 器高	体～底部外面ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	外:淡灰褐色 内:淡灰褐色	夾雑物含まない。 普通	床面 口縁部片	SI08
5	土師器 甕	口径(18.8) 底径 器高	口縁部内外面ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	石英、スコリア、角閃石 やや不良	覆土 口縁部片	SI08№22
6	土師器 甕	口径(19.2) 底径 器高	口縁部内外面ヨコナデ。	外:にぶい黄橙色 内:にぶい黄橙色	石英、長石、砂粒 普通	覆土 口縁部片	SI08№7
7	須恵器 甕	口径(20.0) 底径 器高	胴部外面平行叩き後カキ目。内面アテ具痕。	外:灰色 内:灰色	長石礫 普通	床面 口縁部の60%	SI08№18
8	土製品 支脚	全長[4.0] 径　6.1	外面ヘラナデ。			覆土	SI08№24
9	鉄製品 鎌	全長(6.6) 幅　2.7 厚　0.25 重量　23.25	左右端部が折損。裏面右側に木質の付着が見られる。			覆土	SI08№19

2．土坑・ピット（第22・23図、第11・12表、図版17・18）

土坑は７基確認されている。ＳＫ02・04・06のように、幅１ｍ以下で長方形のもの、ＳＫ05・07のように径約1m前後の円形状のものが確認されている。試掘トレンチから確認された、ＳＫ06～08は遺構確認のみ行った。出土遺物がなく時期がはっきりしないが、長方形のＳＫ04は竪穴住居跡を壊しており、竪穴住居跡よりも新しい。ピットは、径30cm前後と小規模なものばかり全部で17基存在する。数基がまとまって存在しているが、他のピットと配列関係が見られない。出土遺物がなく時期は不明である。規模その他詳細は土坑一覧表・ピット一覧表を参考にしていただきたい。

第11表　土坑一覧表　　[　]現存値

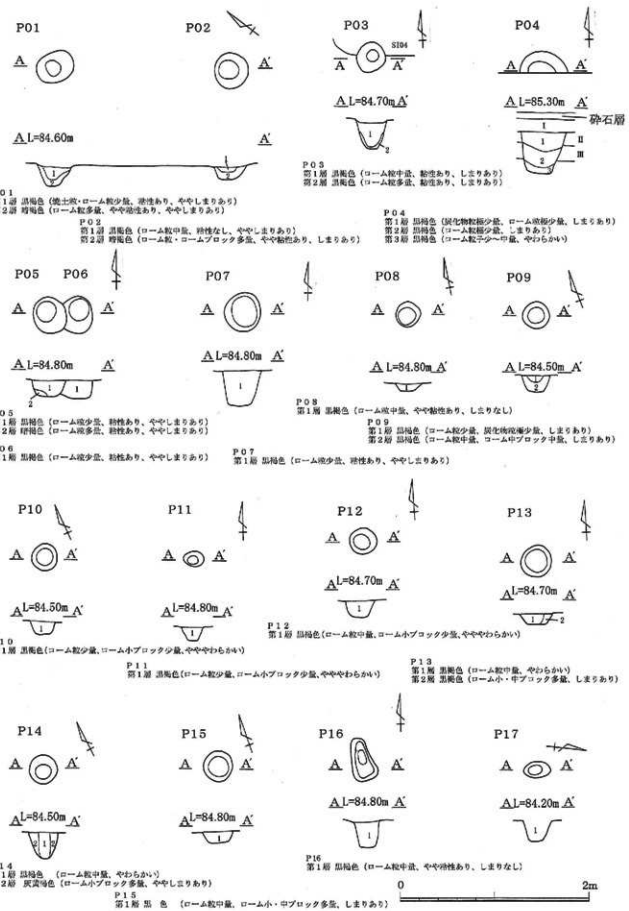
遺構名	位置	平面形状	長径×短径×深さ (m)	備考
SK02	３区南西部87－39G	長方形	[0.54]×0.76×0.60	
SK03	５区西部　85－45G	円形	1.12×1.03×0.08	
SK04	１区中央部　85－44G	長方形	1.64×0.58×0.08	SI07よりも新しい
SK05	１区中央部　85－44G	不明	[0.90]×[0.60]×0.20	
SK06	Ｔ２中央部　87－38G	長方形	[0.82]×0.62×－	確認のみ
SK07	Ｔ８中央部　87－34G	円形	0.72×0.68	確認のみ
SK08	T10北部　87－39G	－	[1.30]×[0.30]	確認のみ



第22図　ＳＫ０２～０５

第12表　ピット一覧表　　[　　]現存値

遺構名	位　　置		平面形状	長径×短径×深さ（m）	備　　考
Ｐ１	１区北部	85－44Ｇ	楕円形	0.42×0.32×0.22	
Ｐ２	１区北部	85－44Ｇ	円　形	0.39×0.38×0.13	
Ｐ３	１区北部	85－44Ｇ	円　形	0.32×0.30×0.30	
Ｐ４	５区中央部	85－46Ｇ	円　形	[0.50]×[0.22]×0.43	
Ｐ５	５区中央部	85－46Ｇ	円　形	0.40×0.35×0.16	
Ｐ６	５区中央部	85－46Ｇ	円　形	[0.27]×0.20×0.20	
Ｐ７	５区中央部	85－46Ｇ	円　形	0.41×0.38×0.37	
Ｐ８	５区中央部	85－47Ｇ	円　形	0.27×0.25×0.07	
Ｐ９	５区東部	85－48Ｇ	円　形	0.28×0.28×0.17	
Ｐ10	５区東部	85－48Ｇ	円　形	0.28×0.28×0.13	
Ｐ11	５区中央部	85－47Ｇ	楕円形	0.21×0.16×0.13	
Ｐ12	５区中央部	85－47Ｇ	円　形	0.28×0.28×0.17	
Ｐ13	５区中央部	85－47Ｇ	円　形	0.35×0.33×0.11	
Ｐ14	５区東部	85－48Ｇ	円　形	0.30×0.30×0.27	
Ｐ15	５区東部	85－49Ｇ	円　形	0.32×0.31×0.12	
Ｐ16	５区中央部	85－47Ｇ	不整形	0.46×0.24×0.27	
Ｐ17	Ｔ６北部	85－43Ｇ	楕円形	0.28×0.17×0.21	



P01
第1層 淡褐色（焼土粒・ローム粒少量、粘性あり、ややしまりあり）
第2層 暗褐色（ローム粒多量、やや粘性あり、ややしまりあり）

P02
第1層 淡褐色（ローム粒中量、粘性なし、ややしまりあり）
第2層 暗褐色（ローム粒・ロームブロック多量、やや粘性あり、しまりあり）

P03
第1層 淡褐色（ローム粒中量、粘性あり、しまりあり）
第2層 淡褐色（ローム粒多量、粘性あり、しまりあり）

P04
第1層 黒褐色（炭化物粒細少量、ローム吸細少量、しまりあり）
第2層 黒褐色（ローム粒細少量、しまりあり）
第3層 黒褐色（ローム粒子少～中量、やわらかい）

P05
第1層 黒褐色（ローム吸少量、粘性あり、ややしまりあり）
第2層 褐褐色（ローム吸多量、粘性あり、ややしまりあり）

P06
第1層 黒褐色（ローム吸少量、粘性あり、ややしまりあり）

P07
第1層 黒褐色（ローム吸少量、粘性あり、ややしまりあり）

P08
第1層 黒褐色（ローム吸少量、やや粘性あり、しまりなし）

P09
第1層 黒褐色（ローム粒少量、炭化物吸極少量、しまりあり）
第2層 黒褐色（ローム粒中量、ローム中ブロック中量、しまりあり）

P10
第1層 黒褐色（ローム粒少量、ローム小ブロック少量、ややややわらかい）

P11
第1層 黒褐色（ローム粒少量、ローム小ブロック少量、ややややわらかい）

P12
第1層 黒褐色（ローム粒中量、ローム小ブロック少量、ややややわらかい）

P13
第1層 黒褐色（ローム粒中量、やわらかい）
第2層 黒褐色（ローム小・中ブロック多量、しまりあり）

P14
第1層 黒褐色 （ローム粒中量、やわらかい）
第2層 灰黒褐色（ローム小ブロック多量、ややしまりあり）

P15
第1層 黒 色 （ローム粒中量、ローム小・中ブロック多量、しまりあり）

P16
第1層 黒褐色（ローム粒中量、やや粘性あり、しまりなし）

第23図 P01～P17

3．溝（第24図、第13表、図版19）

全部で11条の溝が確認されている。ＳＤ01～07は掘り込み調査を行い、ＳＤ08～11は遺構確認のみ行った。Ⅲ層から掘り込まれたＳＤ05やＳＤ04に対してＳＤ01はⅡ層中から掘り込まれており、より新しい遺構である。ＳＤ05からは遺物が出土しており、ＳＤ05は古墳時代後期の溝と考えられる。規模その他詳細については溝一覧表を参考にしていただきたい。

第13表　溝一覧表　　［　］現存値

遺構名	位　　置	主　軸　方　向	幅×長さ×深さ（m）	備　　考
SD01	Ｔ２中央部　87－40G	N－1°－E	1.75×[1.12]×0.60	
SD02	Ｔ２中央部　87－40G	N－24°－E	0.90～1.10×[1.20]×0.40	
SD03	Ｔ２中央部　87－38G	N－3°－E	3.55×[1.08]×0.25	
SD04	Ｔ２西部　87－35G	N－8°－E	2.30×[1.15]×0.30	
SD05	１・２・５区　85-43～85-44G	N－44°－W	0.60～0.95×[24.9]×0.12	
SD06	Ｔ５・７中央部　87－40G	N－3°－E	1.58×2.65×0.40	
SD07	Ｔ７中央部　87－40G	N－26°－E	2.35×2.90×0.58	
SD08	Ｔ８東部　87－38G	N－10°－E	0.79×[0.80]×－	確認のみ
SD09	Ｔ８中央部　87－35G	N－7°－E	1.19×[0.78]×－	確認のみ
SD10	Ｔ８中央部　87－34G	N－11°－E	0.67×[0.80]×－	確認のみ
SD11	Ｔ８中央部　87－34G	N－18°－E	0.96×[1.10]×－	確認のみ

第14表　ＳＤ０７号住居跡出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

No.	器種	法量（cm・g）	特　徴	色　調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 坏	口径(11.0) 底径(5.6) 器高(5.0)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上半部ひび痕、下半部指頭痕。	外：橙色 内：橙色	白色微砂粒 良好	覆土 20%	S107

4．不明遺構その他

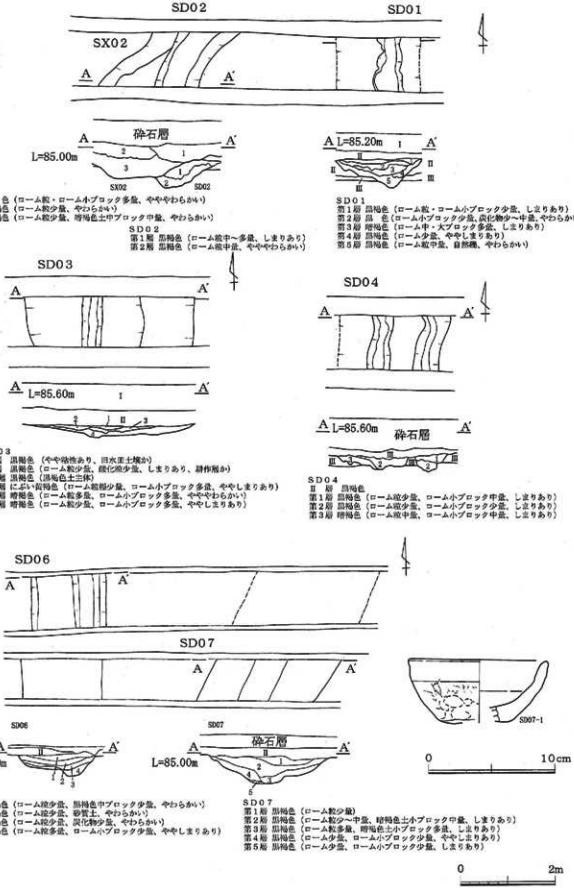
竪穴住居跡の可能性があるものの明瞭に性格特定できなかったものを性格不明遺構（ＳＸ）として報告する。その他に自然河道が調査区内から確認さておりあわせて報告する。

ＳＸ０１（第26図、図版20）

幅4.32m、長さ3.70m以上、調査区内の東端部から西に向かって緩やかに傾斜して延びる溝か土坑の一部のような形状をしている。北側の縁付近にピット2カ所と礫の集積がある。南側の底面には円形・長楕円形の浅い掘り込みが交互に並んでいる。土層は３層の自然堆積で、下層に砂質土を含んでいる。この地点の西側調査区外には自然河道が北西から南東に向かって流れており、自然河道との関係も推測できるが調査区外に延びるため溝とも土坑とも特定できないため性格不明遺構とした。

ＳＸ０２（第24図、図版19）

長辺1.80m以上、短辺1.30m、深さ0.25m。底面はほぼ平坦で、北西壁と南東壁は傾斜して立ち上がる。ＳＤ02と重複しており、ＳＤ02よりも新しいが、東側の壁を捉えられなかったため形状がわからなかった。溝の可能性も考えられる。



SX02
第1層 黒 色（ローム粒・ローム小ブロック多量、やややわらかい）
第2層 黒褐色（ローム粒少量、やわらかい）
第3層 暗褐色（ローム粒少量、暗褐色土中ブロック中量、やわらかい）

SD02
第1層 黒褐色（ローム粒中～多量、しまりあり）
第2層 黒褐色（ローム粒中量、やややわらかい）

SD01
第1層 黒褐色（ローム粒・ローム小ブロック少量、しまりあり）
第2層 黒 色（ローム小ブロック少量、炭化物少～中量、やわらかい）
第3層 暗褐色（ローム中・大ブロック多量、しまりあり）
第4層 黒褐色（ローム少量、ややしまりあり）
第5層 黒褐色（ローム粒中量、自然礫、やわらかい）

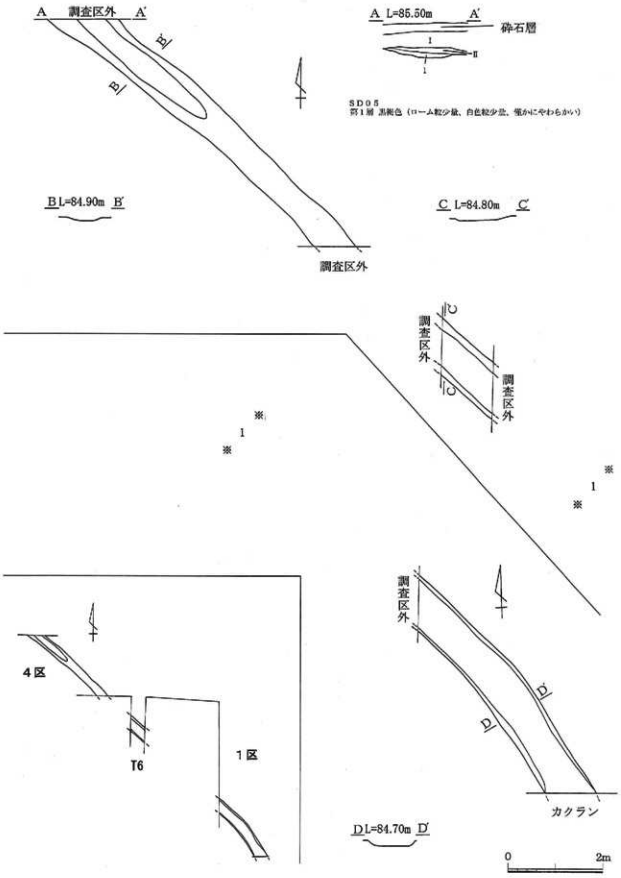
SD03
Ⅰ層 黒褐色（やや強性あり、旧水田土壌か）
Ⅱ層 黒褐色（ローム粒少量、酸化粒少量、しまりあり、耕作層か）
第1層 黒褐色（黒褐色土三層）
第2層 にぶい黄褐色（ローム粒粒少量、ローム小ブロック多量、ややしまりあり）
第3層 暗褐色（ローム粒多量、ローム小ブロック多量、やややわらかい）
第4層 暗褐色（ローム粒少量、ローム小ブロック多量、ややしまりあり）

SD04
Ⅱ層 黒褐色
第1層 黒褐色（ローム粒少量、ローム小ブロック中量、しまりあり）
第2層 黒褐色（ローム粒少量、ローム小ブロック少量、しまりあり）
第3層 暗褐色（ローム粒中量、ローム小ブロック中量、しまりあり）

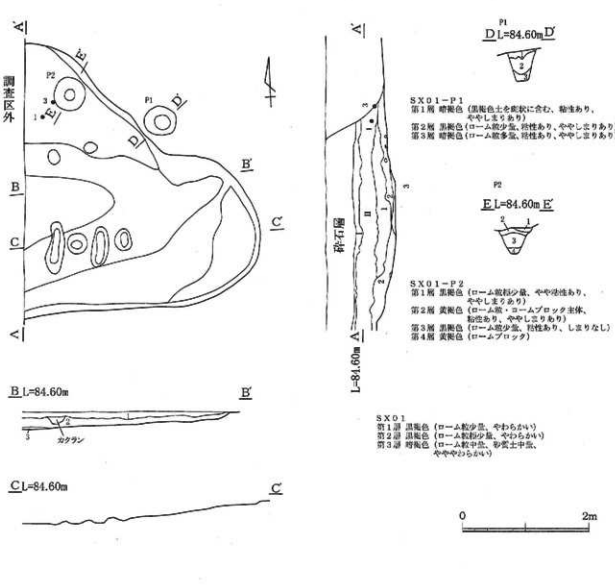
SD06
第1層 黒褐色（ローム粒少量、黒褐色中ブロック少量、やわらかい）
第2層 黒褐色（ローム粒少量、砂質土、やわらかい）
第3層 黒褐色（ローム粒少量、炭化物少量、やわらかい）
第4層 黒褐色（ローム粒多量、ローム小ブロック少量、ややしまりあり）

SD07
第1層 黒褐色（ローム粒少量）
第2層 黒褐色（ローム粒少～中量、暗褐色土小ブロック中量、しまりあり）
第3層 黒褐色（ローム粒多量、暗褐色土小ブロック多量、しまりあり）
第4層 黒褐色（ローム少量、ローム小ブロック少量、ややしまりあり）
第5層 黒褐色（ローム少量、ローム小ブロック少量、しまりあり）

第24図　SD01～4・6・7・SX02


A 調査区外 A'
B
B'
B L=84.90m B'
A L=85.50m A'
砕石層
I
II
1
SD05
第1層 黒褐色（ローム粒少量、白色粒少量、炭かにやわらかい）
C L=84.80m C'
調査区外
C
C'
調査区外
調査区外
※
1
※
※
1
※
調査区外
D
D'
カクラン
D L=84.70m D'
4区
T6
1区
0
2m

第25図　SD05



第26図　SX01

第15表　SX01出土遺物

［ ］残存値、（ ）推定値

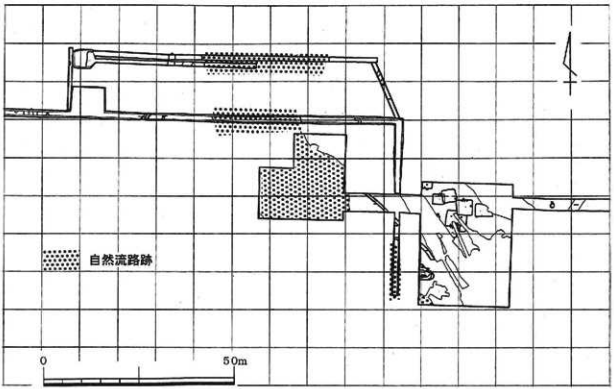
No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	土師器 坏	口径(14.0) 底径 器高(3.8)	体～底部外面ヘラケズリ。内面ミガキ。内面～口縁部外面黒色処理。	外:淡黄灰色 内:黒褐色	スコリア やや良好	覆土 25%	SX-01No.12
2	土師器 坏	口径(13.8) 底径 器高 3.1	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ヘラケズリ。	外:淡黄灰色 内:淡黄灰色	微砂粒少量、白色粒 極少量 普通	P1覆土 35%	SX-01P1
3	土師器 甕	口径 底径 9.0 器高	胴部外面下端ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	外:淡茶褐色 内:淡茶褐色	チャート礫、砂粒 普通	覆土 底部片	SX-01No.10

ＳＸ０３（第11図）

Ｔ８の中央部で確認された、長辺2.80m以上、短辺0.80m以上の遺構で両辺が直交方向に延びており、やや大きめの遺構であることから竪穴住居跡の可能性も考えられる。遺構確認のみ行った。

自然河道（第27図、図版１）

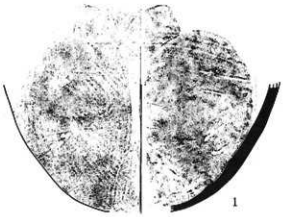
自然河道と見られる大規模な落ち込みが、1区の南西コーナー部、Ｔ６の南部、２区のほぼ全体、Ｔ２・５・７を横断して確認された。確認された範囲での河道の幅はＴ２トレンチで最大幅33m、Ｔ２トレンチで最小幅24m、２区で幅25mである。２区の北東部では自然河道の河岸のラインが蛇行するようにカーブを描いて確認されている。

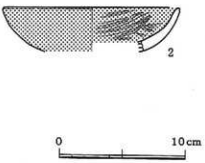


第 27 図　調査区内自然流路跡位置図

５．遺構外遺物（第 28 図、図版 23）

遺構外から出土した遺物には、Ｔ６トレンチ遺構確認面から出土した須恵器甕と表採の土師器坏がある。
１の須恵器甕は外面平行叩き、内面押さえとロクロナデ調整、底部から胴部にかけての破片で、径がやや小さめのため壺や横瓶の可能性も僅かにある。２の土師器の坏は内外面とも赤彩を施している。





第28図　遺構外出土遺物

第16表　遺構外出土遺物　　［ ］残存値、（ ）推定値

No.	器種	法量（cm・g）	特徴	色調	胎土・焼成	出土・残存状況	注記・備考
1	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部外面平行叩き。内面ロクロナデ。	外：淡灰色 内：淡灰色	スコリア やや不良	廃棄層 底部片	T6
2	土師器 坏	口径（13.9） 底径 器高	体部外面ヘラケズリ後ナデ。内面ミガキ。内外面彩彩。	外：赤褐色 内：赤褐色	微砂粒、黒色微粒 良好	表採 15%	表採

Ⅲ　むすび

中島笹塚遺跡から確認された、竪穴住居跡について出土遺物からみた時期と出土遺物の特徴についてまとめてむすびとしたい。各遺構から出土している遺物は、小片で覆土から出土しているものが多く、同一の図版に掲載したものの遺構に伴わないものも含んでいる。

ＳＩ01出土遺物は普通サイズで肩部の丸く張った土師器甕とやや小振りな甕に分かれるが、出土状態から見てほぼ同時期の廃棄遺物と見られる。遺物の時期は６世紀後葉～７世紀前葉頃のものであろうか、住居跡は四本柱を持つ竪穴住居跡のようである。ＳＩ04は土師器坏片と玉瓶が覆土から出土しており、土師器の坏から７世紀前葉頃の時期と思われる。ＳＩ05はカマドの袖と奥壁の掘方内から出土した土師器の甕から６世紀後葉～７世紀前葉頃と考える。ＳＩ07の土師器坏は７世紀後葉頃のものか。ＳＩ06はＳＩ07を壊しておりＳＩ07よりも新しい。出土遺物は８世紀代の土師器甕や須恵器の鉢で、２の台付甕の脚部はＳＩ01出土のものに基部の形状が似ており７世紀代のものの混入かと思われる。ＳＩ08の土師器甕も８世紀代と思われるものがあり、７世紀中頃の土師器坏は小片であり、住居の時期は８世紀代かと思われる。

鉄製品では、鉄鎌が２点出土しているが、ＳＩ05出土の鎌は左手鎌で、基部寄りの位置で元々の折り返しと別に折り曲げられていると見られる。

石製品では、ＳＩ04出土の碧玉製管玉と蛇紋岩製小玉が注目される。編み物石は、ＳＩ01、ＳＩ03、ＳＩ07から出土している。覆土中のため遺構と伴わないかもしれないが、ＳＩ03からは台石が出土している。

第 29 図　周辺調査区と本調査区の位置関係図

１区　全景（南から）

２区　全景（南から）

図版２

３区　全景（南から）

４区　全景（西から）

５区　西部全景（西から）

５区　東部全景（東から）

Ｔ１遺構確認状況（南から）

Ｔ２遺構確認状況（東から）

図版４

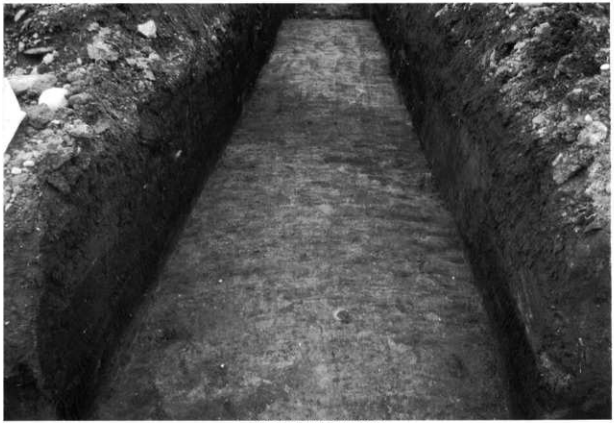
Ｔ３遺構確認状況（西から）

Ｔ３遺構確認状況（東から）

Ｔ４遺構確認状況（南から）

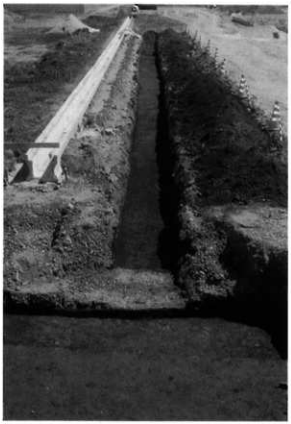
Ｔ５遺構確認状況（東から）

Ｔ５遺構確認状況（西から）



Ｔ６遺構確認状況（北から）

図版６



Ｔ７遺構確認状況（西から）

Ｔ８遺構確認状況（東から）

Ｔ９遺構確認状況（北から）

Ｔ10遺構確認状況（北から）

１区　遺構確認状況（北から）

１区　発掘作業風景

図版８

ＳＩ０１　完掘状況（南から）

ＳＩ０１　遺物出土状況（南から）

ＳＩ０１　遺物出土状況（南から）

ＳＩ０１　掘り方完掘状況（南から）

ＳＩ０２　遺物出土状況（西から）

ＳＩ０２　Ｐ１土層断面（東から）

ＳＩ０２　完掘状況（西から）

図版 10

ＳＩ０３　完掘状況（南から）

ＳＩ０３　遺物出土状況（南から）

ＳＩ０３　遺物出土状況（南から）

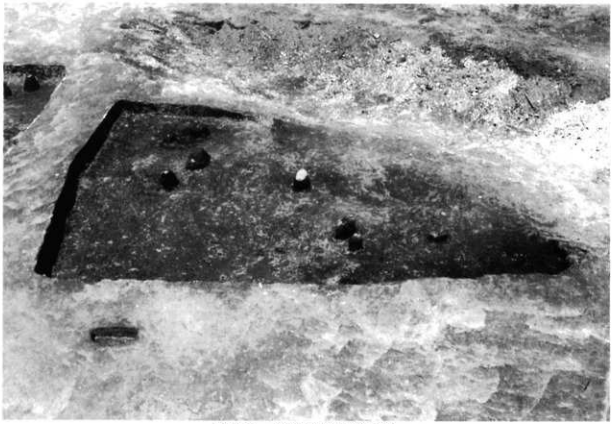
ＳＩ０３　掘り方完掘状況（南から）

図版 12

ＳＩ０３　カマド完掘状況（南から）

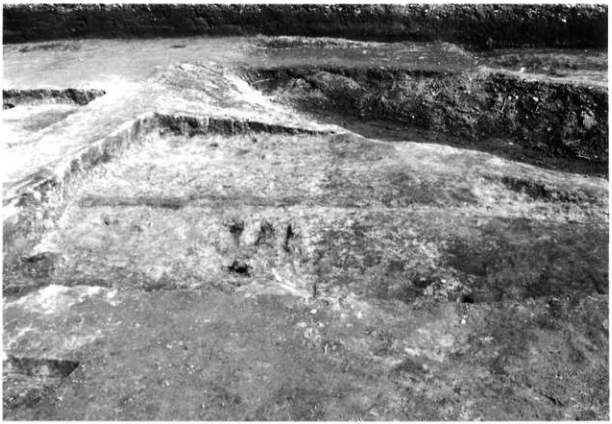
ＳＩ０３　カマド袖石埋設状況（南から）

ＳＩ０４　完掘状況（南から）



ＳＩ０４　遺物出土状況（南から）

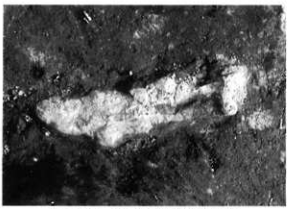
図版 14



ＳＩ０４　掘り方完掘状況（南から）

ＳＩ０５　完掘状況（南から）

ＳＩ０５　遺物出土状況（南から）

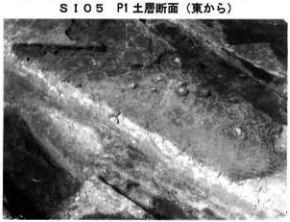


ＳＩ０５　鉄鏃出土状況（南から）

ＳＩ０５　掘り方完掘状況（北から）

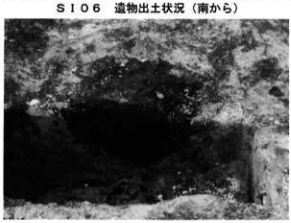
ＳＩ０５　PI 土層断面（東から）

ＳＩ０５　カマド完掘状況（南から）



ＳＩ０６　遺物出土状況（南から）

ＳＩ０６　カマド完掘状況（南から）



ＳＩ０６　掘り方完掘状況（南から）

図版 16

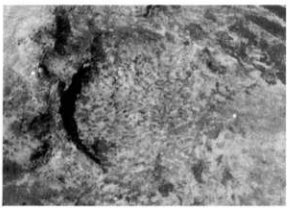
ＳＩ０７　完掘状況（南から）

ＳＩ０７　遺物出土状況（南から）

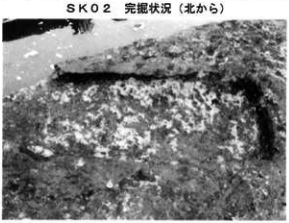
ＳＩ０８　完掘状況（北から）

ＳＩ０８　遺物出土状況（北から）

ＳＫ０２　完掘状況（北から）

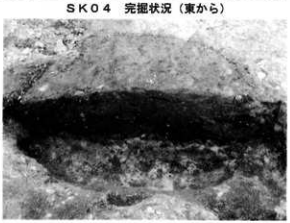


ＳＫ０３　完掘状況（南から）



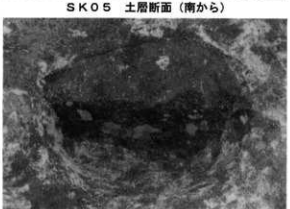
ＳＫ０４　完掘状況（東から）

ＳＫ０５　完掘状況（南から）

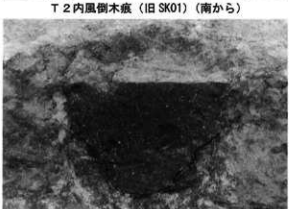


ＳＫ０５　土層断面（南から）

Ｔ２内風倒木底（旧 SK01）（南から）



Ｐ０２　土層断面（南から）

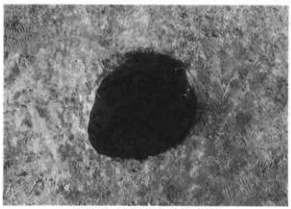


Ｐ０３　土層断面（北から）

図版 18

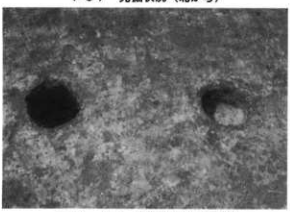
Ｐ０４　土層断面（北から）

Ｐ０５・０６　土層断面（北から）

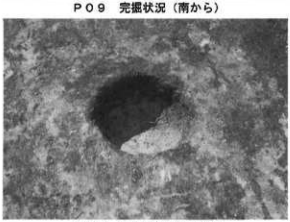


Ｐ０７　完掘状況（北から）

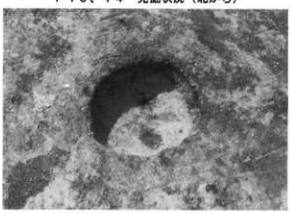
Ｐ０９　完掘状況（南から）



Ｐ１０、１４　完掘状況（北から）



Ｐ１２　完掘状況（北から）



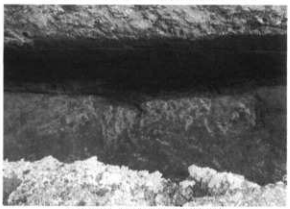
Ｐ１３　完掘状況（北から）

Ｐ１６　完掘状況（南から）

ＳＤ０１　完掘状況（南から）

ＳＤ０２・ＳＸ０２　完掘状況（西から）

ＳＤ０２・ＳＸ０２　土層断面（北から）



ＳＤ０３　完掘状況（南から）

ＳＤ０４　完掘状況（東から）

ＳＤ０５　完掘状況（南東から）

ＳＤ０６　道構確認状況（東から）

ＳＤ０６　土層断面（南から）

図版 20

ＳＸ０１　完掘状況（東から）

ＳＸ０１　遺物出土状況（東から）

S101−1

S101−2

S101−3

S101−4

S101−5

S101−6

S102−1

S103−1

S103−2

S103−3

S103−4

S103−5

S103−6

出土遺物（1）

図版 22

SI04−1

SI04−2

SI04−3

SI04−4

SI04−5

SI05−1

SI05−2

SI06−1

SI06−2

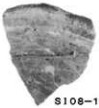
SI06−3

SI07−1

SI07−2

SI07−3

出土遺物（2）


SI08−1

SI08−2

SI08−3

SI08−4

SI08−5

SI08−6

SI08−8

SI08−7

SI08−9

SD07−1

SX01−1

SX01−2

SX01−3

遺構外−1

遺構外−2

出土遺物（3）

報告書抄録

ふ り が な	なかじまささつかいづか
書　　名	中島笹塚遺跡（A区）
副 書 名	
シ リ ー ズ 名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書　第63集
編 著 者 名	宮川　努、土生朗治、越智　徹
編 集 機 関	山武考古学研究所
所　在　地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地　TEL. 0476-24-0536
発 行 機 関	宇都宮教育委員会
所　在　地	〒320-8540　栃木県宇都宮市旭1-1-5　TEL. 028-632-2765
発 行 年 月 日	西暦　2008年1月11日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所収遺跡	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかじまささつか 中島笹塚遺跡	栃木県 宇都宮市 東谷町 インターパーク54街区2画地	09201	4355	36° 29′ 30″	139° 54′ 53″	20070730～ 20070911	1700㎡	(株)福田屋百貨店、中村土建株式会社が行う施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中島笹塚遺跡	集落跡	古墳時代～奈良・平安時代	竪穴住居跡 土坑 ピット 溝	土師器（坏、甕）、須恵器（坏、甕、鉢） 土製品(支脚) 石製品（管玉、小玉、編み物石） 鉄製品(鎌)	古墳時代後期の集落跡。住居跡から碧玉製の管玉が出土している。

要　約	中島笹塚遺跡の調査で、古墳時代後期～奈良・平安時代の竪穴住居跡８軒と土坑や溝が検出されている。遺跡から出土している主な遺物には、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、石製品（管玉、小玉）、鉄鎌等がある。

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第63集

中島笹塚遺跡

発行年月日　平成20年１月11日
発　　行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭１－１－５）
TEL　(028) 632-2764
印　　刷　㈲ 京 文 社 印 刷
TEL　043 (242) 0064